

令和4年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

市民の参加と協働を進める

コーディネーション研究集会

JVCC2022

地域での実践を支える
つながりや学びを生み出す
“越境型プラットフォーム”

リアル会場（東京・京都・大阪） & オンライン

2022年12月17日 土 – 12月18日 日

報告書

認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会
市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会 実行委員会

はじめに

1994年にスタートし、1996年から毎年開催してきた「全国ボランティアコーディネーター研究集会(JVCC)」。2021年2月および2022年2月には、対象とする分野や参加者を広げ、「市民の参加と協働を進める多様なコーディネーション実践研究集会」に衣替えをして実施しました。そして、今回はより親しみやすい集会を目指し、「市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会」と名称をさらに変更しての開催です。なお、英語表記を「Japan Voluntary action Conference on Coordination : Mobilizing people for action」とし、略称を「JVCC」としています。

今回は、これまでテーマとしてきた「越境×対話×共創」を引き継ぎながら、市民の参加を支える人材の“越境型プラットフォーム”の構築を目指しました。なお、単発の集会開催で終わるのではなく、つくるプロセスから振り返りまで、その一連の「場」を、プラットフォームと位置づけ、実行委員会の第3回、第4回は公開で実施しました。現場の取り組みやニーズを共有し、集会当日の分科会の組み立てに活かすことができたと考えています。また、集会での学びを、地域での共創の実践に活かしていただくことにも重点を置き、終了後にステップアップミーティングを開催しました。

集会当日は、多様な場面で、参加を進めるコーディネーターの皆さんに集まっていただくことができました。開催は、「会場のみ」(東京、京都)、「ハイブリッド」(東京、京都、大阪)、「オンラインのみ」と複数の形式を用意しました。新しい挑戦であり、不手際があったかもしれませんが、参加者の皆さんの積極的な参加のおかげで、充実した集会になったと考えています。あらためて感謝申し上げます。

この報告書が、地域での「参加と協働」を進める一助となれば幸いです。

2023年 2月

市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会実行委員会
委員長 鹿住 貴之
実行委員一同

市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会
JVCC2022

目次

P.

- 01 はじめに
- 03 目次
- 04 開催概要
- 05 オープニングセッション

分科会

- 16 A1 地域の中で社協が協働相手として期待されるためには？
- 18 A2 こんな時代だからこそ、“攻めるコーディネーション” 越境しなはれ！
- 20 A3 えっ、その表現って、どうなの？
- 22 A4 防災×災害時要配慮者
- 24 A5 若者×地域
- 26 A6 行政・制度へ働きかける
- 28 A7 コーディネーターとして、どう「機会」を提供していくか
- 30 B1 協創を生み出す技術（コツ）を考える
- 32 B2 “被災者支援とは何か” を、コーディネーションの視点から考える
- 34 B3 「学生の成長」と「地域貢献」をどうコーディネートします？
- 36 B4 地域を基盤にした協働のネットワークづくりを進めよう
- 38 B5 多文化共生×地域福祉
- 40 B6 地域共生社会の実現と行政・専門職・地域住民の参画
- 42 B7 デジタル活用によって、参加をひろげる
- 44 B8 子どもの豊かな体験が大人と地域を変える！

-
- 46 クロージングセッション
 - 50 参加者交流会 / ステップアップ・ミーティング
 - 51 データでふりかえる JVCC2022
 - 54 企画委員名簿・委員会開催実績

開催概要

2022年12月17日(土) 13:30~16:30
12月18日(日) 9:30~15:30

参加費

一般 6,000円 二人目割引*5,500円 JVCA正会員・準会員 5,000円
*同組織の二人目以降の方の割引

方 法

リアル会場（東京・京都・大阪） & オンライン

参加者

148名

主 催

認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会
市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会 実行委員会

協 力

公益社団法人日本社会福祉士会
日本生活協同組合連合会
一般社団法人多文化社会専門職機構(TaSSK)
認定特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)
社会福祉法人東京都社会福祉協議会東京ボランティア・市民活動センター
特定非営利活動法人ハンズオン！埼玉
社会福祉法人大阪ボランティア協会
特定非営利活動法人丹波ひとまち支援機構
特定非営利活動法人ぼらんたす
一般社団法人生き方のデザイン研究所

後 援

社会福祉法人全国社会福祉協議会
社会福祉法人中央共同募金会
認定特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会
認定特定非営利活動法人日本NPOセンター
公益財団法人日本YMCA同盟
特定非営利活動法人日本病院ボランティア協会
一般財団法人自治体国際化協会
特定非営利活動法人国際協力NGOセンター
一般社団法人環境パートナーシップ会議
ESD活動支援センター
一般財団法人児童健全育成推進財団

「当事者」の声を聴き、「当事者」となって社会を築く ～誰も取り残されずに参加できる社会づくりに向けて～

村上靖彦さんは、著書『子どもたちがつくる町 大阪・西成の子育て支援』の中で、子どもたちの声をしっかりと受け止め、子どもたちの思いを起点に、誰もが取り残されずに参加する共同体づくりに奮闘する実践家たちの姿が活写されています。支援の当事者・子どもたちを“お客様”とせず、まさに子どもたちが自分たちの人生を自らつくるため、支援者が奮闘を続けています。

小島祥美さんは、研究者であるとともに、外国につながる子どもたちへの就学支援などに取り組む実践家でもあります。大学生が主体的に参加するプログラム作りや、全国調査に基づきアドボカシー活動にも積極的に関わってきました。多文化共生は日本人／日本社会自体の問題であり、私たち自身も当事者。外国人も日本人も当事者として関わるのが重要な課題となっています。

戸田千登美さんは、長野市社協のボランティアコーディネーターを長く務めた後、いまは高齢者の社会参加を幅広く進めています。市民活動の担い手として期待されている高齢者ですが、内発的に活動の意欲を高めつつ、社会課題を解決する主体・当事者となれるよう多様な取り組みが進められています。

3人のクロストークを通じて、2日間のプログラムを始めるにあたって、参加者が大切にしたいポイントを確認できるオープニングセッションにしたいと思います。

●シンポジスト



村上 靖彦さん（大阪大学 人間科学部 教授）

感染症総合教育研究拠点 CiDER 兼任教員。専門は哲学。著書：『子どもたちが作る町 大阪・西成の子育て支援』世界思想社、2021。『ケアとは何か 看護・福祉で大事なこと』中公新書、2021。『「ヤングケアラー」とは誰か 家族を“気づかう”子どもたちの孤立』朝日選書、2022 他。



小島 祥美さん（東京外国語大学 多言語多文化共生センター長 准教授）

埼玉県生まれ・東京育ち。小学校教員、神戸での NPO 職員を経て、岐阜県可児市での研究活動から同市教育委員会の初代外国人児童生徒コーディネーターに抜擢され、不就学児ゼロを達成。愛知淑徳大学教授を経て、2021 年度から現職。大阪大学大学院博士課程修了。



戸田 千登美さん（長野県長寿社会開発センター 主任シニア活動推進コーディネーター）

長野県出身。子育て中のボランティア活動がきっかけで社会福祉協議会の職員になりボランティアコーディネーションに出会う。多くのシニアと出会い、対話の力、居場所の力を痛感している。「まちの縁側」推進中。

●コーディネーター



早瀬 昇さん（社会福祉法人 大阪ボランティア協会 理事長）

大阪府出身。京都工芸繊維大学工芸学部電子工学科卒。学生時代に各種の市民活動に参加して以来、約 40 年間、市民の「参加の力」が生み出す創造力を生かした民主的な社会づくりに取り組む。水瓶座。赤ワイン党。

早瀬 市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会 2022 のオープニングセッションを始めます。テーマは、「当事者」の声を聴き、「当事者」となって社会を築く。誰も取り残されずに参加できる社会づくりに向けて、私たち市民参加に関わるコーディネーターにとってはとても大切なテーマです。構成としては、村上さん、小島さん、戸田さんの順にお話しいただき、その都度、他のお二人からコメントをいただきます。最初に簡単に自己紹介をお願いしますが、人間食べることが大切ですので、“最後に食べたいものは何か”ということを加えてお話しいただきます。ちなみに私は親子丼ぶり、中学の時に母親を亡くしましたが、その母とよく食べに行っていたのが親子丼ぶり、母親との思い出の味です。大阪ボランティア協会の理事長をしていますが、日本ボランティアコーディネーター協会には立ち上げから関わって、いまに至っています。

村上 僕は大阪が食べたいかな、とくに理由や思い出はないですがあんこ物が好きです。大阪に引っ越してから和菓子が好きになりました。いまは阪大で教員をしています。元々は哲学の研究者だったんですが、20 年前からフィールドワークをするようになり、10 年前から看護師さんの聞き取り調査などもしました。この8年間くらいは今日お話しするような子どもや子育て支援の現場をフィールドワークしています。

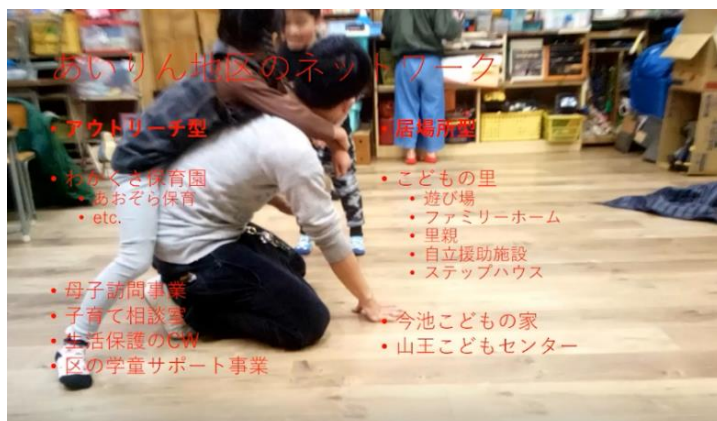
小島 最後に食べたいのは柿の葉寿司かな、めっちゃ好きです。私は関東出身ですが小学校5年生の時に奈良で食べたあの味が忘れられません。元々は小学校の教員をしていて、そこで外国につながる子どもたちに出会ったことが今に至ります。阪神・淡路大震災後の活動に参加したり、大学院に行ったりして、プラプラした後、大学でボランティアセンターをつくる取り組みなどをしました。

戸田 ありきたりですがおにぎりです。小学校の時に寿司屋さんの友達がいる、その子のおにぎりが海苔で真っ黒だったんですね。私のおにぎりは白いところがけっこうあってずっといいなあと思っていました。私は子育て中に児童虐待防止のボランティア活動を始めました。それがきっかけで長野市社会福祉協議会のボランティアコーディネーターになり、日常生活支援事業の専門員を経て、いまは長寿社会開発センターでコーディネーターをしています。

早瀬 では、さっそくシンポジウムに入ります。村上さんの著書に『子どもたちが作る町 大阪・西成の子育て支援』という本があって、いわゆる釜ヶ崎で暮らす子どもたちを支える取り組みについてフィールドワークされたものです。声が届きにくい当事者たちの声を聴いて動いているワーカーたちの話が大変興味深い。この辺りの話をしていただきましょう。

村上 大阪市西成区の釜ヶ崎、あるいは愛隣地区と呼ばれる地域というのは日雇労働者が多い街で、10年ぐらい前までは路上生活の方たちへの支援ということで非常に有名な地域です。ただ、実際には日雇労働者の支援のすごい分厚いネットワークと並行するような形で、子どもや子育て支援のネットワークが発達しています。しかも制度から出発するのではなくて、その子どものニーズから出発して、好き勝手にと言うのかな、すごく自由に支援を組み立てていらっしゃるの、それぞれの団体にそれぞれの顔があって非常に面白いんですね。ざっくりまとめると「居場所型の支援」と「アウトリーチ型の支援」の二種類に分かれているように感じています。

スライドに映っているのは釜ヶ崎で一番有名な「こどもの里」という荘保共子さんという方がつくられた子どもの遊び場であり、緊急時のシェルターであり、ファミリーホームとして長期間6人の子どもたちが暮らせるような施設です。こどもの里は、居場所型になると思いますが、普段は誰もが来られる遊び場なんですね。乳幼児から18、19歳の子どもまで、本当に年代の境目がない。障がいを持っている子どもも来ています。しかも釜ヶ崎の場合、特徴的なのはここだけじゃなくて、他に「今池こどもの家」と「山王こどもセンター」という場所があります。この三つの居場所をハシゴしている子どもたちもいますし、どこか1つ自分のお気に入りの場所を決めている子ども



たちもいますし、自由に自分の行きたいところに行くんですが、複数の場所があるっていうのはすごく大事なことだろうなと思っています。ちなみにそれらが全て一つの中学校区のなかにあるんです。子育てがしんどいというシングルマザーの方がちょっと子どもを預かって欲しいというような場面で、子どもが泊まりに来たりとか、本当に緊急時には子どもがSOSを出して泊まるというようなケースもあります。世間ではこどもの里という場所が非常に有名で、「さとにきたらええやん」という映画にもなりましたし、テレビでも何度も紹介されてご存知の方も多いと思うんですけれども、実は単独で成立しているわけではないんですよね。

子どもたちが居場所に繋がるためには、その背景にすごく長いアウトリーチの活動の伝統があります。昔、不就学児のためのあいりん学園という学校がありました。1962年から84年まであったんですが、そこで日本で初めてのスクールソーシャルワーカーが配置されます。そのワーカーが日雇い労働者の人達が住んでいる日払いのアパートを訪問して、学校に通えていない子どもだったり、何をしてるかよくわからない子どもたちを探す活動をしていました。なので、もう60年前から各家庭を訪問する活動があります。

いまでも「わかくさ保育園」ではあおぞら保育という名前で定期的に行なわれています。それから大阪市全体の事業なんですけれども、母子訪問事業で助産師さんが、特定妊婦と呼ばれる方たちに対して母子手帳を取ってから3か月健診までで、最近ではもうちょっと長い期間訪問できるような仕組みがあります。釜ヶ崎は子どもが多いご家庭もたくさんあり、妊娠出産のサイクルが短いので、かなり長期間にわたって助産師さんが訪問することが可能になります。さらにその助産師さんの後にも心配があったら、あるいはサポートが必要だなと思ったら、そのまま乳児保育に繋げてサポートが入る。保育士さんたちも家庭訪問したりとか、送迎のサービスがあったりします。地域のNPOがボランティアで運営している「ぴよちゃんバンク」という家庭訪問型の子育て支援事業もあります。もちろん小学校に行っても、不登校の子ども達の為のスクールソーシャルワーカーの訪問とか、サポーター達の活動なんかもありますので、いろんな仕方でいろいろな入り方をしています。

一つ言えるのは居場所ってこどもの声を聞くことができる場所なんだろうなということ。家庭で何か大変なことがあったとしても、居場所で信頼できる大人たちがいれば何かシグナルを出す事ができるのかなと思います。母子家庭が多いので、お母さんたちもよく家を訪れてくれる人がいたら、ちょっと愚痴を言うことができるかもしれないし、SOSを出すことができるかもしれない。当事者の声を聞く仕組みを作るためには、居場所とアウトリーチでの生活支援という両方が必要になるなっていうのが、僕が西成で何年か過ごして感じていたことでした。

今年、ヤングケアラーを経験した20代の方達にお話を伺って本をまとめました。Aさんは、お母さんがうつ病で覚せい剤依存で逮捕されてしまって、こどもの里で一年間暮らしていた時の様子をこんなふうに語ってます。ガニっていうのはスタッフの植月智子さんです。

—「ほとんどガニなんですけど、ガニに電話して。もう、ひたすらいつも電話する時大泣きしてみたいな感じやったんですけど。ガニがひたすら話聞いてくれて。ガニもすごい今大変やと思うのに、（中略）ひたすら泣いたり、暴言吐いたりとかしかできなかったんですよね、ファミリーホームの自分の部屋で大暴れして泣いたりして、死にたい死にたいってずっと言ってる。そんなときはほんまに、めっちゃ死にたいとか思ったけど、全部ガニが止めてくれたっていうのがあるかなっていう感じですね」

いまの子ども支援、特にヤングケアラー支援の文脈だと、学校の先生はあんまり家庭の事情に深入りしないで聞いてくださいみたいなアドバイスがされることをちらちら聞かれます。でも実際に子どもが欲しているのはやっぱり親身になってくれる大人の存在、ずっと継続的にサポートしてくれる大人の存在で、Aさんは社会福祉士になって、ご自身が支援の道に入られた方なんですけれども、そういう風に振り返っていらっしゃいます。

もう一人の方は今池こどもの家を利用してたけいたさんという方です。にしっぺさんというのは当時、今池こどもの家にいた西野さん、いまは大国保育園の園長さんです。

—「にしっぺが、僕がそういうことになったんで（お母さんが膜下出血で倒れた）、気をつけてくれていたりとか、家庭環境があまり良くないって言うのも知ってたんで、そういう学校に行かなかったりとか、学校で途中で帰ってきたりっていうのはやっぱりしてたんで、僕の親代わりじゃないですけど、そういうところはいろいろしてくれて。お母さんが倒れた時にもやっぱり心配してくれて連絡くれたりとか。いったらどう？とかっていうのはめっちゃしてくれて、周りのサポートが僕はあってよかったなって思う」

という風におっしゃっています。中学1年生のときにお母さんが倒れて、でもその前の小学校時代から西野さんがサポートされていたんですね。西野さんは保育士さんで、この時は児童館

にお勤めだったので、小学生のけいたさんと会っているんですけど、そこから今に至るまで、つまりハタチ過ぎになってもサポートされているんですね。これって凄いことで、今は職務上の責任はもちろんないんですけども、ずっとこうやって継続的に頼れる大人がいるっていうことは彼らにとってすごく大きな支えになっていることを実感しました。外から見ると西成のヤングケアラーたちはすごく大変なんですけど、彼ら自身は何とかなっているっていう側面があって、その他の地域でヤングケアラーを経験された方たちのような孤独感を持ってないんです。これが、大きな違いじゃないかなと感じました。

相談窓口やヘルパー派遣とか、学習支援ってことがいまヤングケアラー支援の文脈で話題になることも多いんですけども、まずはヤングケアラーの場合、子どもサイドに立つ人と同時に親支援が絶対に必要になってきますし、親御さんたちがサポートを必要としてるわけで、虐待の場合もそうですね。虐待って親御さんがすごい混乱に陥っているわけなので、親御さんは生活支援かもしれないし、心理的な支援かもしれないですけども、サポートを必要とされていて、そのシグナルが虐待って呼ばれてしまうような形で出てきてしまう。社会の中に子どもの声をずっと聴き続ける大人は極端に少ないので、そういう人の存在があるとよいのだろうなあと思います。

何かトラブルが起きてしまった後の話ではなくて、どんな子どもでも楽しく遊べる場所。そこに誰か大人がいて、何かのシグナルをキャッチできる状態だったら、何かあった時でもすぐにアクションを起こせる。そういうことだと思うんですね。どんな子どもでも幸せに暮らせるような、幸せに遊べるような、そういう場所だったり、遊び場だったり。すごくシンプルで、単純な結論なんですけども、それが僕が西成で教わった事でした。

早瀬 ありがとうございます。釜ヶ崎という場所は大昔に西成騒動があったりして、非常にガラの悪い街みたいなイメージがあるんですが、実際には誰も排除しないっていう基本的なトーンがある街なので、そんな中で民間の支援者たちがずっと長く関わる。公務員の方だったら異動がありますよね。それが無い形でずっと抱え続ける人たちがたくさんいるんですね。こんな取り組みやってる地域があるということなんですけど、小島さん、どんな感想持ちましたか。

小島 先月たまたまですが、西成高校に伺いました。学校全体で生徒一人一人を把握して、自立のために何ができるか考えていらっしゃる先生方の姿が印象的でした。

村上 そうなんですよ。一人ひとりについていろんな支援者の方々がいて、いろんな情報を把握していて、顔が見える関係の中でネットワークを作っているから、何かあったときに誰かが心配事に気づき、支えられるんだなと思います。

早瀬 ネットワークがすごく厚いんですね。戸田さんはどんな感想を持ちましたか。

戸田 村上さんのお話をお伺いしていて、長野で言うと小さな村、中山間地域が、まさに家の中から子どもや孫の話までお互いに知っていて、その地域へ行くと、普段の暮らしの中にこんな状況がまだ生きているなと思いました。小さなシグナルを感じられる人がいることで地域が豊かになっているっていうことは確かにありますね。シグナルを出せるという話をお聞きしていて、長野市社協のボランティアセンター時代を思い出したんですけど、サマーチャレンジボランティアっていうのを毎年やっている中で、終わった後にある中学生がやってきて「申し込みに来てここは相談ができそうだと感じた」と。そして母親がDVを受けているとか、自分も虐待を受けているというようなことを話してくれたことがありました。子どもたちが普段の暮らしの中で、ここは相談できそうな人がいるな、相談していいのかなっていうように思える人や場、いろんなものを受け入れることができる寛容さを醸し出すことが非常に大事だなと思いました。

村上 本当にそうですよね。でも、子どもって自分では言えないことが多いので、誰かキャッチできる人がいるっていうのはすごく大事だなと思います。実は西成はよそ者の町なんです。そこが中山間地域と大きく違うところなので、すごくオープン。村社会的なものが存在しないというのが独特なんだろうなと思います。中山間部にはそこなりの難しさもあると思いますし、大阪のほかの地域だったり、東京のような閉鎖されている都市部や、学歴社会が浸透しちゃってる場所はむしろものすごく大変だと思いますね。

早瀬 いまの話の中で、サマーチャレンジボランティア（夏休みに短い日数ボランティア活動体験する）の窓口だった場所で、ここは相談できる場所だなと感じさせたというのはすごいですね。そういうにおいを出せるっていうのは、大切なポイントなんだろうなと思いました。

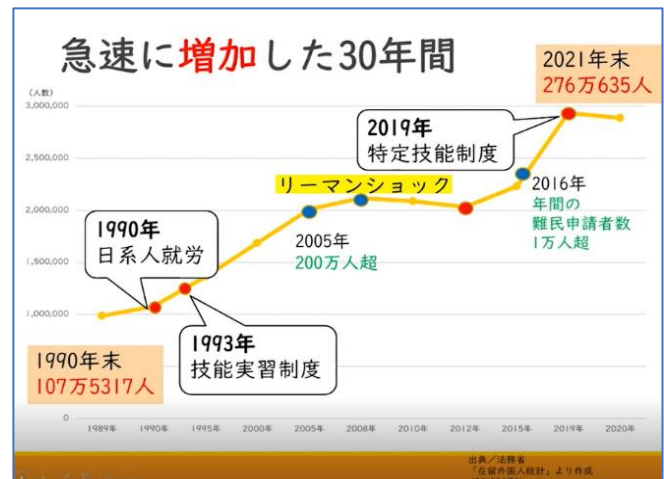
次は、小島さんからの発題です。小島さんは、長く外国につながっている子どもたちをサポートされています。いわゆる多文化共生に関するテーマは外国人の問題というよりも、本当は日本人の問題でもあるわけですが、このあたりのことを小島さんから話しいただきます。

小島 外国につながる子どもの不就学ゼロをめざす、これは私の使命と思って取り組んでいます。きっかけは神戸の活動をしていた時にこうした子どもたちに出会ったことです。私が小学校教員であった1994年、20歳の時に子どもたちのことをもっと知りたい。そう思い、教員をやめて世界の旅に出ました。その後、阪神・淡路大震災の被災地で活動している中で、1999年に学校に通ってない外国人の子どもたちと出会い、この子たちの問題を解決したいという思いで、今に至ります。

このスライドは外国籍住民の方たちの30年間を示したものです。1990年に日本の労働力が足りないということで、大きな法改正があります。その時には外国籍住民が107万人、それが2021年末には276万人に増加しています。増加してきた背景には、日本の労働力不足が大きく関係したわけです。海外からみると2019年の時のデータで日本は移民の数がなんと世界第4位。外国籍の方たちが増加しているにもかかわらず、日本は全く変えないことがあります。それは就学義務の対象外という扱いです。このようななかで、文部科学省は、2019年度に初めて外国籍の子どもたちの就学実態調査を行ないました。その結果、小学1年生から中学3年生に相当する12万人の子どもたちの中で、学校に通えていない不就学状態の子どもたちは5人に1人であることがわかりました。18.2%この数を覚えておいてください。SDGsでは17のゴールがあり、4つ目に「質の高い教育をみんなに」とありますが、統計で言いますと世界で最も小学校年齢の子どもたちが教育にアクセスできていないのが、サハラ以南のアフリカ地域が一番多く、その数がなんと18.8%。ほぼ、国内の外国籍の子どもたちの不就学の比率と同等なんです。この現状に驚いたのが日本の政府です。そこからいろいろ取組が始まったんですが、昨年度は第2回目の調査が実施され、少し現状は変化したものの、まだまだ不就学状態の比率は高く約10人に1人という現状です。

一方、義務教育諸学校、日本の学校に通っている子どもたちが多いという実態も見えてきました。次は、この日本の学校での実態を見てみましょう。近年、公立学校の小中高ですけれども、日本語がわからないけれども、頑張って通う子どもたちが増加しています。外国籍のみならず日本国籍でも日本語がわからな子どもたちもたくさんいます。でも、こうした子どもたちは日本語ができないというだけで、ものすごく低く評価されてしまうことが多いんですね。そのことによって、学校現場では外国籍の子どもたちが特別支援学級に通っていて、そうした子どもたちの比率が近年とても高くなってきています。学校や先生からの求めがあって、私もそうした子どもたちのところに行くんですけども、関わってみると言語能力が低いというようなことはないんです。言葉や概念をいっぱい学ぶ段階の子どもたちですので、子どもたちの中では、これが日本語、これがポルトガル語、これが中国語と区別して覚えていません。複言語の環境のなかで言語能力が発達しているだけであるにもかかわらず、日本語がどれだけできるのか、というところだけで、能力も人格も判断されてしまうのです。

そうした中で、当事者意識を若者たちに高めるために、愛知県内にある大学にボランティアセンターを作っていく過程で取り組んできたことを紹介します。一つが、外国につながる子どもたちとの仲を深めていくため、地域の外国籍の子どもたちの家庭に学生たちがホームステイするという取り組みです。若者たちは「家庭の中は外国なんだ!」ということを知ります。一方で、日本の学生たちが家に来ると、保護者の方たちは「このテレビのリモコン、どうやって動かしていいかわからない」などの相談をはじめます。保護者も子どもたちも日本語で喋



ります。でもその使い方が書いてある説明書が読めないから、リモコンがきれいなビニールに入ったままで置いてある。ホームステイしながら一晩過ごすとお互いいっぱい発見があるんです。そんな発見をした若者たちが、二つ目の活動として、子どもたちが抱えているそれぞれの悩みやモヤモヤをカタチにするということもします。子どもたち自身が、この事を言っているのかなとか、伝えたいと思っていることを2分くらいの映像づくりに挑戦します。そこに大学生がサポートするわけです。つくった作品は、通う学校や学級で見いただく。そうすると学級の中では子どもたちもたちの背景の理解につながっていくので、すごく好評です。十数年、ある地域では取り組んでいます。特に、関わる若者たちはもっともっと、子どもたちのことを知りたくなってきます。自分が外国人となって生活してみたいと。それが三つ目で、若者たちと一緒に海外にも行って、生活してみることにチャレンジしています。そうしていくと若者たちは当事者の思いに自然と寄り添い、不思議と卒業後の進路までも変わっていくのです。当初は学校の先生になろうと入学した者が、外国籍の方たちが暮らしやすい社会を作りたいと市の職員になったり、また子どもたちのための教材を作りたいと出版社に入る者がいたり。ボランティア活動に参加する若者たちが化けていく姿をこの間、たくさん見てきました。

なぜ私が不就学ゼロを目指しているかと言いますと、そういう子どもたちが神戸にいたからです。1999年のことです。その問題を解決したいと思ったときに、神戸市や兵庫県、そして国は相手にしてくれませんでした。なぜならば、就学義務の対象外だからです。そのため、学校に行っている子どもの数さえも当時はわからなかったもので、学校に行っていない子どもたちもわからなかった。つまり、外国籍の不就学児とは、社会から見えない子どもであったわけです。この子たちを社会で見えるようにしたい。そうした研究に協力してくれたのが、岐阜県の可児市でした。そこで私がしたことは家庭訪問。当時総人口10万人のうち、外国籍住民が4,000人という街のなかで、学齢期の子どもがいる家庭を全て訪問しました。それを地域の方たちとタッグを組んで挑みました。全部の家庭に行ったのでいろいろわかったんです。それによって、市が動きました。可児市長の「不就学ゼロ」宣言により、市の教育委員会にコーディネーターという新しい職務ができました。私は初代コーディネーターに抜擢されて、地域住民だけでなく、さまざまな機関や組織みんなをつないでいろいろな取り組みをやってきました。それから15年が経過した2019年になって、やっと冒頭にご紹介した国の就学調査につながったんです。近年になって、やっと国内に暮らす外国籍の子どもたちの姿が社会で「見える」子どもになってきました。アドボカシーというちょっと大げさかもしれませんが、研究という方法で私は、外国籍の子どもたちの声や姿を可視化させながら、その解決に今取り組んでいます。

早瀬 ありがとうございました。可児市で4,000人にアウトリーチされたということですが、すごい件数ですね。

小島 そうですね。夜勤の方たちもいらっしゃいますので、朝早く家庭へ行ったり、昼間働いているところは夜に行ったりとか、外国人労働者は勤務時間がかなり変動しますからね。当時、私は一文無しでしたので、いつもお腹が空いていたんですよ。で、「あの子ボランティアで、無給で実態調査をしているんだって」というのが、当事者の中で広まったんです。そんな状況であったので、私が外国人家庭の家のピンポン鳴らすと「あっ、あんたがお腹空いている？」って言われるんですよ。そして、ご飯をご馳走してくれながら、話をしてくれるんです。私にとっては調査ではあったんですが、すごく楽しかったです。どういう思いで来日して暮らしているのか、どんな思いで子育てしているのか。保護者たちの労働環境の話などさまざまなことを伺いました。神戸の活動時に関わった多言語の情報やネットワークは、ものすごく活きましたね。神戸での経験を活かして、多言語情報物を届けながら、個別相談にも対応しながらの訪問調査でした。

早瀬 このセッションでは当事者意識を高めていくということを切り口にしてはいますが、市民活動に参加して行くことの大きな意味として、ボランティアを通じて市民自身が問題を他人事じゃなくて我が事、自分事にしていくというプロセスを活動の中で得ていくということも大切なポイントだと考えています。そうか、外国に行ってみると自分も外国人になりますよね。あるいは外国の方に自分の家に来てもらうというホームステイじゃなくて、こちらが向こうに行くという方法。それも当然あっていいですね。戸田さんいかがですか？

戸田 私も実は不就学児に出会ったことがあって、社協のボラセンにいる時の相談で、市営住宅の何階かに住んでいて、車椅子を使っていたんです。その後、養護学校に入学をする形になったんで

すが、まさにそれまではいないことになっていて、学校に行けていないことに驚いた記憶があります。もう一つは、私も子育て中に自分の子どものクラスに、祖父母が中国から帰国された方で、お母さんは東京で働いていて、孫は長野に預けられている子がいて、仲良くなってよく遊びに来ていたんですが、突然学校に来なくなって。彼女は一体どこに行ってしまったんだろう、違う場所に移ってちゃんと学校へ行っているんだろうかっていうことがあって、そんなことも私がこの世界に入る一つのきっかけにもなりました。それからやはり外国の子で、お母さんがもう自分で分かる日本語では勉強がみられないからと児童養護施設に入りたいと学校の先生に相談されて、先生が困ってボランティアセンターに相談が入りました。話を詳しくお聞きして、その親子のことをおそらく日本語教室の人たちは知っているんじゃないかなと思って、昔から活動している方に相談したら「ああ知ってる。今夜、タイ料理食べながらお母さんの話を聞いてきてあげる」と言うてくださって、聴いてみたら、そのお母さんは深刻な話というよりは国民性もあって、自分が育てられなければ誰かに育ててもらえばいいぐらいな気持ちで相談したことがわかりました。少し育児ノイローゼっぽいところあったので、だったら日本語教室の傍らで、ボランティアが子どもたちに日本の勉強を教える場を作ってしまうばいいと思って、高専の学生に声をかけたら、学生たちがいいよって言ってきて。日本語教室は週末にあるんですが、付いてくる子どもたちがみんな宿題を持ってきてお兄ちゃんたちが教えてくれるようになりました。

早瀬 日本語のハンディがあるがゆえに 本来の力よりも低く扱われてしまっているという実態がありますが、さすが戸田さん、いろいろ繋がっていますね。村上さんはいかがですか？

村上 いやすごいですね、4,000人訪問されるってびっくりです。訪問だけじゃなくて、学生さんが一緒に活動されて、子どもたちとビデオを作るっていうのはすごく素敵な活動だなと思いました。で、ご飯を食べながらっておっしゃってましたね。小島さんは支援者として入っているわけではない。支援をしてあげるっていう立場じゃなくて、ご飯を食べさせてもらいながら話を聞いていくっていう、その入り方ってすごい大事ですよ。ともすると、日本はすごく制度的に固定した形の支援が多いので、どうしてもヒエラルキーが出来てしまう。そういう場面をすごくたくさん見るので、そうじゃない同じ土俵で、まったくフラットな形ですよ。学生のボランティアも一緒にホームステイをしたりして、リモコンの操作をちょっと教えてあげるっていう、全然プロが支援をしてあげるっていう形ではないので、隙間に追いやられてしまった人たちがどうやってマジョリティの社会とつながるかっていうことの大きなヒントがあるなと思いました。ボランティアっていう形って、支援者ではなくて、市民として、ボランティアを媒介としてフラットにつながっていくっていう手がかりになるんだなあっていうことを教えていただきました。

早瀬 いまの話を伺って思い出したのが、阪神・淡路大震災の時に、ボランティアの方が大勢いらっしゃるんだけど、ボランティアに来てほしいというご相談は来ないんですよ。それで「何かすることありませんか」って聞きに回る。そういう訪問手伝い隊っていうのを組織したんです。そうしたら「何かすることはありますか？」って言うので、お前ら帰れ帰れという感じなんですよ。で、どう対応したらいいかということ、夜みんなで話し合った時に、あるコーディネーターが「何かすることありませんか」じゃなくて、「この地域で困っておられる方をご存知ありませんか」って聞いてみたらどうかと。どういうことかということ、何かすることありませんかというのは困ってるあなたに対しては上から目線なんですよ。でも、私たちはようわからへんの誰かこの辺で困ってる人を教えていただけませんかという、これは下から聞いている感じになるんです。そしたらね、やあ実はって、少し心開いてくれるんです。我々が支援者として入るのか、我々もわからないので困っててどうしようという姿勢で入るのか、全然相手の心の開き方が違う。この辺はまさにコーディネーションの“対等”にすることに関係する話なんだなと思いました。ご飯を食べさせてくださいって言ったわけでは無いと思いますが、それで有名になって、みんなが心を開いてくれた1つの理由かなと思ったりして、すごく学ぶものがあるなと思いました。ありがとうございました。

続いて戸田さん、長野で高齢の方たちが社会活動を進めていくためのサポートをされているんですが、その辺りの取り組みについてご紹介いただいて、まさに当事者になっていくためにどのように後押ししたらいいのかというお話を伺えればと思います。

戸田 長寿社会開発センターは名前のとおり長寿社会を開発するということで、主な対象者はシニア層もしくはシニア一歩手前の方たちに働きかけをして、地域とつながり、社会参加をしようということで、その一つのスローガンとしては、寝たきりになっても、ハンディがあっても居場所と

出番がある豊かな長寿社会。元気シニアだけをイメージしたものではありません。こんなことを大事にしながら、県内にいまコーディネーターが11人いて、シニアが主体となって活動していくための働きかけとして、地域の現場をシニアに見せて、いまこんな事が起こってるんだよということを伝えていく。都会でもない長野にもそんな問題があるのっていう驚き方をされるシニアの方が結構いらっしゃいます。私達としたらやはり地域で起きていること、本当に多様で複雑化した課題をシニアの皆さんに見てもらう機会を提供していくことを大事にしています。

もう一つ現場を見せるということでは、日常の暮らしの中で思いをもって活動されている人たちがいることも意外と知られてないので、その現場を見せていきたいなと。で、それを見せるための手法は、私たちが間接的に話すこともあれば、出会いの広場というもうすごい熱気なんですけれど、何かをしたいって考えているシニアとシニアを求める団体やNPO、社協とかが出合う場を作っています。出店方式で、何十団体もが出店するところにたくさんのシニアが来て、直接やり取りをする。団体の皆さんにはポイントとして、いつどこで何をしているっていうことではなく、なぜというきっかけや思い、活動を通して見えてきたこと、ホットなエピソードなど、特に思いの部分を語ってほしいと事前に話しています。この場でつながって活動の主体となっていく、当事者になっていくっていうシニアはたくさんいます。

例えば、病院帰りの高齢者を心配したある家の主が、家の前にちょっとベンチを置いてみると、小さな営みなんですけどそこに人が繋がる意味のある空間ができる。それから、通学路に面した家の壁に落書きをされた家の主

が、落書き禁止の貼り紙を出すのではなく、自分でベニアの壁を全部緑色に塗って、なんと黒板にしまったんです。そういうトラブルをチャンスにする、思いや想像力のある人たちが地域にはいるんですね。新しい住民と元々の住民がなかなか出会わない、じゃあ知り合うきっかけって何かしらって投げかけると、シニアのおばちゃん3人が考えて、ゴミ出しの日にコーヒーを出しちゃおうと、ゴミステーションでコーヒーを出すことにしたんです。そうすると不思議なことに、ここに緩やかな居場所ができて、あの人最近来ないねとかいう話になったり、お菓子の差し入れがあったり、子どもたちはお菓子のにおいがするのにかいままでゴミ出しになんか付いて来なかったのに、お母さん早くゴミ出しに行こうよって子どもに促されて来るようになる。そうすると大人たちも子どもたちと遊ぶようになって、じゃあ遊ぶんだったらちょっと和室とか借りて遊ぼうかと、動ける大人が主体となって企画する。そしたらある時、子どもがここを通るブラジルの人たちを見て、あの人たちに挨拶をしようって提案したんです。で、大人は一瞬ちょっと・・・ってなりますが、子どもの提案に、みんなでおはようと言うようになって、いろんな人が繋がるようになっていたりするわけですね。

そうするとシニアたちは自分も何かまだまだいけるなって。その気持ちを一人で考えずにみんなで話しながら考えられるような場を私たちは設けています。共感しあって、仲間になって、動き始めていくというようなことが起きています。これを対話ではなく「等話」といっています。等話は時間をちゃんと等しく使おうねということで、シニアはしゃべりすぎてしまうことがあって煙たがられたり、ああまたあの人延々と、っていうことがあったり、なかなか若者たちが対等に話す機会がなかったりするので、いま若者とシニアで等話の交流カフェっていうのをオンラインを使って県外の大学生も参加してやっています。若者からも意外と自分たちのこれからの生き方とか人生のことを学んだとか、親でも先生でもない人の意見を聞くってことがなかなかないので、この等話の働きかけをさまざまところでしています。非常に心地いい時間が流れますね。そこに一貫してコーディネーターが関わるところが特徴です。

もう1つの事例として、あるシニアが公民館で会議をした帰り道に「レコードは捨てられないなあ」ってみんなが話しているのを聞いて、自分も音楽が好きだから過去のレコードを持ち寄って、レコードにまつわる思い出を語りながら音楽を聴こうという会を始めました。で、私たちコーディネーターがこの活動を知ってもらおうといういろんなところに情報発信していたら、「地域のお茶飲みサロンは女性がいっぱいいてちょっと行くのは嫌だけれども、こういう場なら、俺たち自分たちで作りたいな」と言って、県内にどんどん伝播しています。最後にもう一



つ、長野市でとても人気のある、ゆる〜いおっさんの会。これもシニア大学の専門コースのOBが、退職してこれからどうしようという不安に駆られて始めました。“亭主元気で留守しよう”を合言葉に、ここに入ってくる男性シニアはみんな何かしたいって思ってるんですね。その何かしたいを見つけたり、きっかけをつくったりをコーディネーターが手伝っていく。仲間に誘われたり、機会さえあれば、何かしたい気持ちが主体的な動きになっていくんです。ゆる〜いおっさんの会は参加するメニューが選択できるのと、自分たちがやりたいことを提案できる自由さ。その中で仲間になっていくので、みんなが考えて工夫をしています。子どもの活動につながっている方たちもいれば、自分たちで農業荒廃地を借りて農業をするとか、参加しない自由もある。ほっといたら来なくなる人もいるんだけど、立ち上げたシニアたちが個々のメンバーのことを気にして、連絡をしたり、声掛けをしたり、気にしているよということを発信している。このコーディネート力によって、ここが安心の居場所になっていて、何かをやるうって動き出していくのかなと感じます。

早瀬 ありがとうございます。長野もいろいろと面白いことをなさっておられますね。黒板の話、あれは“まちの縁側”ってやつですかね。普通落書きされたら困り事なんだけれど、それを否定せず一工夫すると優しい地域になるんだなと。村上さん、この話を聞いていかがですか？

村上 こういう居場所作りもすごい大事だし、黒板のエピソードも、シニアと子どもがどうつながっていくとか、若者とシニアが集う会をされてるというのもおもしろい。日本は世代を超えてつながりにくい社会だと思うんですね。とくに高齢男性は孤立しやすい。分断はいろんなレベルで起きていて、例えば、小学校は学年割になってるので、学年が違ったら全く遊ばないってこともある。もっと世代を超えて交流できたら楽しいことがたくさんあると思いました。一つ質問なんですけど、戸田さんにとってコーディネーターっていうのはどんな仕事なのかを教えてくださいなと思いました。

戸田 いつも心に思っているのは「人には力がある」ということを前提にコーディネートをしたいということです。その力を出せるように繋いだり、寄り添ったりするのがコーディネーターなんだろうと。対等につながるということも非常に大事な私の中でのキーワードです。ボランティアを受け入れる側にもその価値や意味を伝えたいと思いますし、課題を一緒に解決することが大切だと感じています。

村上 戸田さんは話の中で何回かコーディネーターが大事な役割を果たしていて、その場を作っているというニュアンスのことをおっしゃいましたよね。

戸田 何かしたいな、できそうだって気持ちになった時に、そこから一人で行動に移せる人って少ないんですね。なので、思った気持ちを形にして行くプロセスにコーディネーターが寄り添うわけで、必要な情報を提供したり、考え方だったりとか、一緒に揺れながら、悩みながら実際の行動に移して行くプロセスを支える。コーディネーターがいることによって「まさか俺がこんなことするとは思ってなかったけど」「こんなことに関わる人生になっていくなんて」と変化していく。そんな役割が大事だと思っています。

早瀬 ありがとうございます。この点に関して小島さんはどう思われますか？

小島 お話を伺っていて、こういうところに子育て世代の外国人住民が参加できたらすごくいいな、と思いました。例えば、外国人ママが日本人と関わろうと思った時にどうしても言葉の壁があるために、支援される側とする側になってしまう。だから、髪の毛をちょっと切りたんだけどどこかいい美容室ないかなとか、子どもの洋服を安く買いたいんだけどどこかいいお店あるかなとか、普通の話がしたい。でも、相談という言葉の問題とも扱われて、行政の窓口が何時から何時までやってますよという案内しかされない。フラットな関係で、共通の趣味だったりとか、関心事をテーマに高齢者のみなさんが集っている中に、外国人ママやパパたちも入っていけたらもっと面白いことができたり、地域が豊かになって行くようなことってあるのかなと思いました。

私が不就学ゼロのために可児市で取り組んだことで良かったことの1つが、学校給食の中の取り組みです。給食で郷土料理として鮎を食べる日があったんです。そこで、ブラジルの子たちが多かった地域だったので、それならばブラジル料理も出してみようということになりました。ブラジル料理が学校給食に入ることによって、子どもたちの関心に繋がったんです。いろいろな

国につながる子どもや保護者たちがいるからこそできる教育。そんな発想は、地域のなかでもっといろんなことができるのかなあと戸田さんのお話を伺って思いました。

早瀬 先ほどの自宅の塀を黒板にしてしまったように、マイナスやトラブルをプラスにして行くというか、いろんな取り組みを面白がっていますよね。いまのブラジル料理の話だってやっぱり外国にルーツのある人たちがいるから面白くなっていくという風に、そういう発想法やとらえ方がいろんなの市民活動を繋いでいくときに大切なポイントなんだろうなと思います。ここまでの話を伺って、こういうところがポイントなんだなと思うことをお話しいただけますか。

村上 僕にとってはすごく新鮮な話で、本当に楽しかったです。一つはボランティアということを媒介としたことで、みんなが主人公というか、最近よく当事者という言葉が使われますけれど、主役になれる。支援される側とボランティアする側ではなくて、ボランティアが訪れた側の人たち、子どもであったり、外国の方であったり、高齢者の方もいらっしゃるわけですが、みんなが主役というか、主体になっている。ボランティアが一方的にケアをするのではなくて、訪れた先の方たちもケアをする。これってすごく大事なことですし、いわゆるプロの支援の世界では生じないことで、市民社会を作っていくためには本当に大事なことでと気づかされました。もう一つは、僕たちはすごく分断されているなかで、どうやって異なる集団をつないでいくかという課題への一つのヒントが、今日話されたような場所にあるんだなあと感じました。皆さんすごく熱心に、意識的に活動されていて本当に重要なことですね。最後に早瀬さんも強調されたトラブルを面白がるって、こういう反転ってすごくいい。ユーモアだったりっていうのは、何かを変えていくときのきっかけになるもの、エネルギーだと思いますのでとても印象に残ってます。

早瀬 小島さんはここまでのお話の中で、どんなことを感じられましたか。

小島 私はいま大学に勤めていますが、今の若者たちはかつてよりも地域により関心を持っている子が多いなと感じています。それは外国につながる青少年たちも同じ。生まれたところは違うけれど、自分を育ててくれた街をジモトと表現するんですよね。可児市でも、私が出会った頃は子どもだった子が今では結婚して子育てするような時代になっていますが、積極的に地域との関わりをもっているんですね。ジモトを良くしたいっていう思いでいるんです。

早瀬 戸田さんもここまでの話を聞いていかがですか。

戸田 小島さんが、高齢者が集まっているところにも外国人がいっぱい入ってほしいっておっしゃってくださいって、村上さんも異なる集団をつないでいくってということがまだまだ開拓できてないところがあると話されて。いままで若者とシニアとの関わりを考えてきたんですけれども、シニアが関われる対象ってまだまだあると思いました。その多様性がきっと地域を豊かにして行くんだろうし、みんなが安心して暮らせる社会や地域になっていくということで、私の中ではお二人の話をお聞きして、また新しい視点を持ち帰ってコーディネーションに活かせるなと思いました。

早瀬 戸田さんは常にどこに活躍の場があるかというような視点から見てられるんですよね。

この集会は、市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会ということで、ボランティアコーディネーターという、そういう職名を持たない方も含めて、多様な場面で市民の力を生かして社会の課題を解決して行く。その中で活動に参加する市民自身も元気になってくる。そういうコーディネーターのための集会なわけです。最後に、そこに参加する皆さんたちに対してのメッセージをいただいて締めていこうかなと思います。

村上 本当に貴重な機会をいただきました。僕がもともと持っていた市民や市民運動のイメージと違った側面を知ることができてすごく良かったです。誰もが主役になる社会をつくる担い手なんだと、そのためにこういう仕組みや仕掛けがされているんだなあっていうのがよくわかりました。社会にはすごい大変な状況で隙間に置かれてしまっている方たちがいっぱいいる。どうやってそういう方たちと繋がり、その方たちが主体となって、この社会の課題と一緒に解決するパートナーになることができるのかなと考えているんですが、今日の話の中にヒントがあると思いました。どうもありがとうございました。

小島 本日はお話をさせていただきましてありがとうございました。外国につながる子どもという、遠い存在に思うかもしれません。でもすごく身近にいるんですよね。いまは日本生まれ、日本育ちの子たちも増えていきますので、こうした子たちも一緒に地域づくりの仲間として、当事者

が当事者をつないでいくような、主役になれるような仕組みが地域の中でできてくるといいな。そんな風に思いながら話を伺っていました。 ありがとうございます。

戸田 私もいつもはあまり考えない外国籍の子どもたちのことを伺って、非常に刺激を受けましたし、あらためて、繋がっていく場がもっとできたらいいなと思いました。小さな地域の一人ひとりの想いや、発想力を発見もしたいし、逆にそれをまた見せていきたいなということを感じました。本当にありがとうございました。

早瀬 今日は3人の方たちにそれぞれにユニークな取り組みをご紹介いただき、とても刺激的なお話をいただきました。これから分科会の中で皆さんにはいろんな活動や人に出会っていただけますが、お互いに前向きなメッセージを出し合えるような、そういう場になることを期待して、この場を閉じたいと思います。皆さん、どうもありがとうございました。最後まで聞いていただいてありがとうございました。



.....

■参加者の声（アンケート結果から）

- 市民活動は我が事にしていくプロセスであること、コーディネーターの立ち位置や振る舞いなど、基礎となることを確認できた。困難な状況にあってもユーモアやおもしろがることも大切（忘れがち！）。
- みなさんの熱量にやられました～
- 常に気にかけてくる存在がいることの重要性を感じ、それらを実践されている方々のお話を聞けてとても勉強になりました。
- 地域の事例を知り、実際に足を使って動かれている方のお話はとても興味深かったです。
- 説得力があり、印象的な事例ばかりでした。当事者の視点、人の力を信じる。コーディネーターは、情報提供とつなぐことと、戸田さん簡単に言われていましたが、ゆるい感じでの効果的なひと押し、出来そうで出来ない、やはり凄いコーディネーターだと感心しました。ご飯食べてきな、と言われる小島さんのフレンドリーさが未就学児の見える化に繋がったのですね。全国の調査に結びついたことですが、10年かかるなんて 世の中を変えていくのは手間と時間がかかるものなのですね。その時の子ども達は大人になってしまいましたよね。でも当事者だった子ども達が大人になって、気持ちの分かる支援側の大人になっているなんて素晴らしいです。
- 濃いーい内容なのに重くなく、明るくて、早瀬トークに引き込まれていきました。皆さんからうまい話を引き出していくコーディネーター、すばらしかったです。

A1

12月17日(土)

地域の中で社協が協働相手として期待されるためには？

「どうせ社協・・・」を超えよう！

地域社会の課題に取り組む組織として、社会福祉協議会（以下、社協）はさまざまな団体、組織と協働しながら解決にあたっていきます。ところが、時に「社協は頼りにならない」「相談したけれど断られた」など、ネガティブな話を聞くこともあります。

実際に、地域内外のNPOなどと共に地域課題にあたっている社協の事例をお聞きし、協働の相手として頼りにされる社協とは、どうあるべきなのかを一緒に考えました。

登壇者

事例発表者 有原 領一さん（宮古市社会福祉協議会（岩手県）総務課長）
高木 直さん（調布市社会福祉協議会（東京都）市民活動支援センター長）
児島 秀樹さん（グッドモーニング調布！（東京都）代表）
進行 唐木 理恵子さん（紬ワークス 代表）

タイムスケジュール

参加者数

13:30 趣旨説明、オリエンテーション
13:40 事例報告、質疑応答 宮古市社協の事例
調布市社協の事例
14:40 グループワーク① 悩みの共有
15:15 休憩
15:25 グループワーク② 解決策の検討
16:10 発表、コメント
16:30 終了

10 名

分科会の内容

●事例報告（宮古市社会福祉協議会）

東日本大震災での話だが、うまくいった出会いも、うまくいかなかった出会いもある、タイミングがある。東日本大震災の時には、半年間ボランティアセンター（以下、VC）を立ち上げた。スタッフ不足、資金不足、スキル不足など課題があり、様々な団体と協働していくことになった。始めは、社協職員だけで運営していたが、社協対ボランティア（以下、V）という関係になってしまう。Vが帰ってくるのが憂鬱だった。次第に市民のVが間に入ってくれるようになり代弁してくれた。運営にかかわってもらうようになり、当事者が運営に入る大切さを感じた。

平成 21 年に、この集会の前身である「全国ボランティアコーディネーター研究集会」参加し、そこで劇的な出会いがあった。震災後の5月に入り、その集会で出会った「ワールドビジョンジャパン」のスタッフが支援に入ってくれた。仮設住宅の孤立解消プログラムなど、多くの支援をしてくれた。自分が外部の団体と被災者の間に立っているので、自分の対応一つで被災者への対応が変わってしまうことが怖かった。あれでよかったのかなど。東日本大震災では、外部の団体とのやり取りが多かった。

平成 28 年と令和 1 年には台風による災害があった。各地で起きていたので、外部からの支援を待つ前に宮古市内の人たち中心でやるしかない。震災の時に活動していたVがサポートしてくれた。私が所属している「みやっこベース」の学生たちは、放課後に集まって自主的に活動してくれた。

その後もひきこもりのカフェなど、地域内のNPOなどとのかわりはある。寄付などのお金をもらうことの責任は、NPOに教えてもらった。

●事例報告（調布市社会福祉協議会）

社協は住民に認知されているのか、協働を求める相手にとってどこが入口になるか。どの部署の誰が、協働を求める相手の手をつかむかによるのではないかな。

調布市社協は市民活動支援センターに運営委員会がある。この運営委員会も協働の入り口。運営委員に声をかけてもらったり、紹介してもらうこともある。

「ちょうふチャリティーウォーク」は、「えんがわファンド」の原資を集めるイベントで、今年は久しぶりにリアル開催した。「えんがわファンド」は、調布市民がサポーターになり、地域の団体に助成金を出す。その成果が地域に還元される。資金とつながりを作る。つながりが重要で、職員が助成先の団体の活動に参加して、広報誌で紹介するなどしている。助成1年後には、交流会で活動報告してもらう。

協働の入り口は、団体同士ではなく、その団体の〇〇さんであり、印象が良ければつながる。職員として、

自分が社協の顔として信頼を得る。そのためにはしっかり話を聞き、自ら動くこと。人事異動や定年もあるので、しっかり引き継ぐことも大切。

(グッドモーニング調布！)

調布に住んで 10 年。会社員として仕事中心だったので調布に友達がいないと気付き、何かしようと団体を作った。始めに仙川駅のゴミを拾う活動をし、仲間ができた。次に公園で緑化活動をしていたところ、みつばちに気づいた。はちみつ作りをしたいと考えたときに「えんがわファンド」に出会った。助成金申請をして支援センターとの関係が始まった。助成金をもらい、みつばちの巣箱 1 箱がレンタルできた。

私の活動は、クリーンアップ活動から緑化、助成金をもらうことで、みつばちプロジェクトが立ち上がり、現在は小学生向けの環境プログラム「グリーンスクール調布」も立ち上げた。

市民活動支援センターの運営委員もしていて、センターを活性化するための「えんがわ文庫」プロジェクトを立ち上げた。センターが分かりにくい、入りにくいとの声から、ロビーに市民参加型のコミュニティライブラリーをスタートした。センターと出会い、共に歩んできた 8 年間。センター長も 8 年伴走してくれた。センター長がいてその先に社協がある。

●グループワークの発表

「社協とうまく付き合うコツ」として、以下の発表があった。

- ・答えがあるとは思わない
- ・この人と思った人を放さない
- ・つかみとつかまれた（つかんだ）手を放さない
- ・お互いがダメもとで声をかけてみる
- ・そうだ！社協に行こう！
- ・他セクターと同じ景色を見る、ともに活動する
- ・課題意識を共有する

●登壇者等からのコメント

- ・一般人からすると社協は縁遠いイメージ。しかし困ったときには社協となるはず。いずれ頼る相手になるので、普段から間口を広げておいてほしい。
- ・社協を頼りに訪ねてきた人をどう受け止めるのかに尽きる。信頼関係が生まれれば、その先は難しくない。一緒に考えていく、寄り添っていくこと。地域は変化していくので、社協職員は地域をよく知っておくこと。
- ・同じ景色を見る、課題意識を共有するということが大切だと感じた。
- ・協働はお互いに知ることから始まる。
- ・この人だったら相談に乗ってくれそうと思ってもらうことが大切。運営委員会も協働の場。



参加者の声

- ・地域によって社協との関わり方に違いがあることを学びました。登壇者や参加者の熱い思いが感じ取れました。自分も地域の社協とさらに対話を進めて行こうと思います。
- ・社協に関わらず、他セクターとの協働のコツについて全国の参加者と確認できたので。他の参加者に「それいいよね」と肯定してもらうことにより、今行っている活動（手法や意義）の再確認もできました。登壇者の方の発表でそれぞれ、「災害時の協働に必要な視点」、「社協とはそもそもどんなものなのか」、「移住後、自分のできる所から始めた活動で自分も周りも元気に」というところが参考になりました。

分科会担当者のコメント

参加者は、社協職員と社協と協働したい人が半々であり、分科会を通じて双方の理解が少しでも深まったのではないかと期待している。

分科会担当者

熊谷紀良（東京ボランティア・市民活動センター） / 武藤祐子（千代田区社会福祉協議会）
運営サポート：文珠正也（日本協同組合連携機構） / 蔦直宏（日本生活協同組合連合会）

A2

12月17日(土)

こんな時代だからこそ、 “攻めるコーディネーション” 越境しなはれ！ 逆境にこそ新時代がはじまる

「集まらない」「訪問できない」と、コロナ禍で感じた「～できない」がたくさんありました。「With コロナ」「After コロナ」の時代と呼ばれるいま、市民はボランティアコーディネーターに何を求めるのでしょうか。「できない」に飲み込まれず、「こんな時代だからこそ」と、新たな“攻めるコーディネーション”も生まれています。この分科会では、社協の“出島”であるボランティアセンターや地域での活動のなかで生まれた“攻める”取り組みを聞き、明日からの「私のコーディネーション」を考えます。

登壇者

ファシリテーター 西川 正さん（ハンズオン！埼玉 副代表理事）
与力 長谷部 治さん（神戸市社会福祉協議会 地域支援部担当課長）
事例発表者 須田 正子さん（地域交流ボランティア「よりあい＊ええげえし」（埼玉県）事務局長）
巽 里美さん（神戸市兵庫区社会福祉協議会ボランティアセンターボランティアコーディネーター）
＊与力とは…分科会の企画、もちろん分科会当日も、助力・加勢していただきました。

タイムスケジュール

参加者数

13:30 オリエンテーション
13:35 企画趣旨説明
13:40 チェックイン：自己紹介を兼ねた「聴き合う時間」①
14:10 事例発表①
15:10 事例報告②
16:00 深堀タイム&グループセッション
16:30 チェックアウト：聴き合う時間②

9 名



分科会の内容

- (1) チェックイン
事例発表①“言い合うことは聴き合う”を体感。参加者全員が「今、思うこと」を話した。
一気に親近感が芽生え、会場が瞬く間に温まった。
- (2) 逆境にこそ新時代がはじまる！事例発表① 須田正子さんに発表いただいた。
・親の介護、育児、少子高齢化・地方分権・社会福祉改革・介護保険のスタート、そんな中、始めた活動。そしてコロナがやってきた。周りがどんなに変化しても、地域活動で知り合った仲間と、これまでも、今も、これからも変わらない「お互いさまの関係づくり」。「言い合うことは聴き合うこと」をモットーにした「お茶でおしゃべり」は、「高齢になったら、移動が難しくなって、この場所に来れなくなった時も、パソコンでつながろう」としていたものを早速取り入れる機会になった。高校生などの関わりもでき、まさに「自分らしい良い暮らし（マイケアプラン）」を仲間と共に組み込んでいく。どんな時代が来てもチャレンジは続くコーディネーションの発表だった。
- (3) 逆境にこそ新時代がはじまる！事例報告② 巽 里美さんに発表いただいた。
・コロナ禍で活動が途絶えたことで、モチベーションがさがったり、活動現場への備えがなくなり、その間、ボランティアに興味を持っても新たなボランティアが定着しなかったり…このままでは、つながれてきた“想い”が途切れてしまうのではないかと課題を持っていた。「なければ活動をつくれればいいんだ。」「みんなが関われる」「その人らしさを引き出す」「またやりたい」と思ってもらえる活動を創ればいい。「ボランティアはやっぱり楽しい!!」とコロナ禍入職、コロナ禍しか知らないコーディネーターが攻め続けた、走り続けたコーディネーションの発表だった。
- (4) 深堀タイム&グループセッション
ファシリテーターと与力による深堀タイム。事例報告①②の徹底解剖を目指しておこなった。
・対面でしていた今までの活動がオンライン開催に変更した。もともと、「この場所に来れなくなった時は、パソコンでつながろう」としていたこともあり、「その時代が到来した」感覚だった。参加

者平均年齢79歳。参加への誘い方、オンライン（pc）サポートの秘訣、高校生や大学生とのオンライン交流など、逆境だからこそ新たなつながりをうみだす。「越境するツール」としてのZOOM。「自分にもできそう」と思えるように、仲間同士でパソコンなどを教えあうなどのコーディネーションの大切さなど、地域のコロナ禍で「活動～無理～い」をいっぱい聞いている参加者からのハテナにすべて答えていただいた。

・出演する場がない、活動する場がない。「ないない」からボランティア環境の多様化に向き合うコーディネーション。ちょうどコロナの前から取り組んできた「自宅のできるボランティア」も、コロナ禍だからこそさらに進めることができた。そして、オンラインのできるボランティア。居場所を探すボランティア。ボランティアと気づいていないボランティア。その中には「その人らしさ」を大切にしたいコーディネーションが随所にあった。

・明日からできるコーディネーションキーワードを出し合った。

(5) チェックアウト

事例発表①の“言い合うことは聴き合う”で締めくくり。分科会の感想と、明日からの私のコーディネーションを言い合い、聴き合った。事例発表①②からTTP(徹底的にパクリ)することを全員で確認した。

(6) おまけ JVCC 京都会場

京都会場では、リアル参加を実感してもらえるように、また、学生ボランティアの参加の機会として龍谷大学生ボランティアによる、分科会の感想を貼りだすウエルカムボードを作成してもらった。B3分科会のスタッフにもたくさん助けていただき、「リアル」を「全力」で楽しんだ！



参加者の声

- 楽しく参加させていただきました。事例がわかりやすく、今後の参考にさせていただきます。
- リアルでそれぞれの活動の悩みと工夫が聞けて、パクリたい事例が沢山あった。
- 居場所づくりのための基本姿勢に深く共感し、勇気づけられました。
- 世代、環境が異なってもボランティア活動を絶やさないように創意工夫していくことが、なんか良い。
- 同時多発で似たアイデアを実現している人達がいらっしゃることを知れて本当に嬉しかった。
- 組織で孤独になるコーディネーターも、一人じゃないんだ、方向性も間違えて無かったんだとホッとした。
- 仮にボランティアコーディネーターから異動になっても、私自身はその精神を持ち続けるだろうと感じた。

分科会担当者のコメント

- ・3年ぶりのリアル会場での分科会。参加者に助けをいただきながら、リアルを楽しむ分科会になりました。どんな時代が来ても、やってみようと思わず、攻め続けるコーディネーターがいる限り、コーディネーション力で切り開けることが随所にちりばめられた事例発表でした。これから、どんな風に時がかわっても、元々やっていたことを信じて、カタチに拘らず新たなつながりを紡ぐことのやさしさ。そして、楽しそうにしているところに人は越境すると感じました。
- ・これまで培ってきたものを大切にすることと、新たにできることを考えて取り組むことを事例発表から聞きました。コロナを見据えていたわけではない、思ったよりもしかしたら早くこのタイミングが来た、ということはあるかもしれないが、柔軟に、しなやかに今ある危機を乗り越えるコーディネーションの事例が随所にあって、そこには仲間やボランティアの「顔」がリアルに感じられるものでした。どうあるべきなのか、を随所に感じられて、分科会担当者も元気になりました。

分科会担当者

土田恭仁子（宇治市社会福祉協議会） / 橋詰勝代（高島市社会福祉協議会）

運営サポート：國實紗登美（龍谷大学ボランティア・NPO活動センター） / 小原宗一（北区社会福祉協議会）

山崎智文（京都産業大学ボランティアセンター）

A3

12月17日(土)

えっ、その表現って、どうなの？

～言葉から考えるボランティアの価値

多種多様な分野で活動するボランティア。この「ボランティア」を言葉から考える分科会です。

ボランティア活動が「奉仕」や「慰問」と報道される。「ボランティア派遣」「有償ボランティア」「ボランティアの活用」という言葉がニュースなどで使用される。その度に、モヤモヤを感じることはありませんか？

どうして、えっ？と思うのか。そこに潜む違和感を起点として「ボランティア」にまつわる言葉のあれこれ、ボランティアの価値について語り尽くしてみました。

登壇者

問題提起者 清水 由子さん(岐阜市教育文化振興事業団 岐阜市生涯学習センター
ボランティアコーディネーター)

事例発表者 石黒 建一さん(社会福祉士事務所うらら 和 ソーシャルワーカー)

情報提供者 早瀬 昇さん(大阪ボランティア協会 理事長)

進行 竹脇 恵美さん(長野県長寿社会開発センター木曾支部 シニア活動推進コーディネーター)

タイムスケジュール

13:30 開会、企画メンバー、当日運営スタッフ紹介

13:32 趣旨説明(JVCA 報道アクションチーム経過報告)

13:42 問題提起(実体験から) 清水由子さん

13:57 事例発表(新聞の掲載データから) 石黒建一さん

14:12 事前アンケート結果共有

14:22 グループワーク1 自己紹介・感想共有

15:05 全体共有・登壇者による対話

15:27 グループワーク2 ボランティアの価値

16:05 全体共有(セルフワーク含む)

16:20 登壇者コメント・終了

参加者数

28 名

内訳：会場 10 名、オンライン 18 名



分科会の内容

ハイブリット開催である本分科会では、登壇者は全員会場に集合し、オンラインの環境を確認のうえ、スタートした。冒頭、竹脇さんの進行により、登壇者及び企画メンバーを紹介した。

● 問題提起(実体験から)

まずはじめに清水さんから、岐阜県内の新聞記事を参照しながら、①本文中に「国際協力機構ボランティア OB の紹介」記事の見出しが文中にない「海外奉仕」となぜなるのか。②10 年間ホスピタルクラウン活動を行う団体の紹介記事で、団体ホームページには「慰問」という言葉は一切ないにもかかわらず、記事の見出しも文中も「小児病棟慰問」となるのは違うのではないかと。③民間会社のコミュニティ紙でボランティアに「さん」付けしている。いろいろな考えがあるが、私は上から目線に感じるが皆さんはどうか。④県立高校の学校評議員のときに、会議資料に記された「生徒が地域の施設を慰問」という表現に対し「訪問とした方がよいのでは」と意見したところ、議事録から消され次回以降呼ばれなくなったという経験がある等、複数の問題を提起した。

● 事例発表(新聞の掲載データから)

続いて石黒さんから、数多くのボランティア関連の新聞報道からモヤッとする記事を次の6つに分類し紹介した。①有償系：雪かきの互助活動を見出しに「高齢者を支える有償ボランティア」としている等3件紹介。②ポイント導入系：施設でボランティアをし、ためたポイントを地場産品などと交換できる市の介護支援ボランティ

ア事業等2件紹介。③実施主体はさまざまである紹介。④混在型：本文中はボランティア活動だが、見出しは「介護施設で有償奉仕」となっている記事やコミュニティビジネスで成立しているボランティアナースを「有償ボランティア」と紹介している。⑤合わせ技型：見出し「認知症カフェでポイント制度導入」という記事内に「有償ボランティア組織」の記載がある。⑥三段活用型：見出し「奉仕活動の報酬に地域通貨」という記事内に本文では「ボランティアをした子どもに報酬」という記載もあった。ボランティアの活用を前提とした制度設計をするような偉い人や世の中に憤っていると石黒さんは語った。

● 事前アンケートの結果共有

参加者への事前アンケートによる「慰問」「奉仕」「ボランティアの活用」「ボランティア派遣」「ボランティアポイント制度」「ボランティアさん」「有償ボランティア」という7つの言葉のうち全部「とても気になる」「気になる」と答えた人が7人いたこと等、回答を数値化し紹介した。

● グループワーク1 自己紹介(名前・所属・一番好きなお寿司ネタについて等)・感想共有

6つに分かれグループワークを行い、全体で感想を共有した。

● グループワーク2 ボランティアの価値

発表では、一方通行ではなく双方向の関係になれる／有償活動をアシスタントと呼び分ける／人とつながる・やりがい・楽しさ／自由(参加もやめるも)／双方向の学び／自発性が大事、などが共有された。

● セルフワーク「私は、こうしていきたい」&発表

「違和感に敏感になる」「丁寧な説明をしていく」「新聞をきちんと読もう」「できるときにわかってくれそうな人から伝える」「本来の意味を伝えていく」「角度を変えて伝える翻訳者になりたい」「ボランティアって言葉で伝えず、中身で伝える」「ボランティアマインドを養う」「相互理解と正しく伝える」など一人ずつ紙に書いて発表し、登壇者から一言ずつコメントを受けて終了した。

参加者の声

- ・自分の頭の中でグルグルしていたものが少し整理されました。「慰問」、「奉仕」、「有償ボランティア」、「ボランティアの活用」と言った表現によって、立場の対等さや自発性、自由といった部分が隠されてしまうということが分かりました。
- ・言われてみれば、違和感を感じていたけれど、そのままにしていたなあと思いました。改めて、意味を込めて言葉として表現する(表現の意味を考える)ことが大事だと思いました。
- ・時代とともに言葉の意味合いは変わっていくので、正直そこまで分科会で投げかけられていた言葉に対して、違和感を感じていないと言うのが私の気持ちです。

分科会担当者のコメント

- ・考えすぎかもしれませんが、それ以上に思考停止に陥ってはいけないと思います。(石黒)
- ・時代と共に変化し時代を反映するものであるからこそ、言葉に敏感であり続けたいと思います。(清水)
- ・参加申し込みが多く、言葉の問題を課題と思っている方が全国に多くいらっしゃることに意を強くしました。今後も一緒に考えていきたいです。(竹脇)
- ・有償Voの話題は活動者側の視点になりがちですが、コーディネーターとしての議論が必要だと感じました。(高橋)
- ・引き続き、ボランティアの価値について考えていきたいと思っています。次回は会場参加でぜひ。(橋詰)
- ・現場の関係性を的確にあらわせる言葉を常に考えていきたいと思っています。(足田)

分科会担当者

JVCA 報道アクションチーム 青山織衣(大阪ボランティア協会) / 熊澤利和(高崎経済大学)

高橋義博(府中市市民活動センタープラッツ) / 橋詰勝代(高島市社会福祉協議会)

足田恵子(杉並区社会福祉協議会)

防災×災害時要配慮者

当事者とともに取り組む道筋を考えよう
～障害のある人・外国人のケースから

誰ひとり取り残さないインクルーシブ防災の実現が目指されるなか、いざというとき、障害のある人・情報伝達に配慮が必要な外国人など要配慮者の人たちとつながるには、日常的な取組みと助け合える関係を築くことが大切です。分科会では障害者と多文化共生の2分野から、災害時の配慮の視点や地域を支える外国人防災リーダーの活動など具体的な取組みや当事者の声を聞きました。そして、障害のある人や外国人が、助けられる存在としてだけでなく平時から地域の防災に参加していく道筋とコーディネーターの働きを、全員で考えました。普段顔のみえにくい人たちを「知る」ことから始まり、ともに取り組むヒントを得る機会となりました。

登壇者

事例発表者 古賀 由美子さん（北九州市障害福祉団体連絡協議会常任委員）
遠山 昌子さん（生き方のデザイン研究所代表理事・コーディネーター）
上原 ジャンカルロさん（三重県国際交流財団専門員）
玉城 エリカさん（多文化防災ネットワーク愛知・名古屋）
コメンテーター 明城 徹也さん（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JV0AD）事務局長）
進行 藤井 美香さん（横浜市国際交流協会） / 矢富 明德さん（佐賀県国際交流協会）

タイムスケジュール

参加者数

13:30 オリエンテーション
13:35 開会・趣旨
13:45 I「知る」4つのケース報告を聞く
障害者分野 : 古賀由美子さん・遠山昌子さん
多文化共生分野: 上原ジャンカルロさん・玉城エリカさん
14:35 参加者自己紹介
15:05 II「深める」話題を深める
「ケース報告を聞いて」明城徹也さん
15:27 体験コーナー（防災ダンス・多文化防災ゲーム）
15:45 ディスカッション / これからの取り組みにむけて
16:30 終了（放課後タイムへ）

12 名

分科会の内容

- 開会・趣旨
開会趣旨および流れの確認後、ケース報告で各発表者から、自己紹介とともに、取り組みをお話いただいた。
- ケース報告1 「地域で安心して暮らしたい」 古賀由美子さん
障害のある人の社会参加の推進及び地域との繋がりを大切に、共生社会の実現へ向けて活動する連絡協議会の事務局担当団体としての報告。地域生活における障害のある人の現状、災害時に置かれる状況は障害により異なること、災害時支援を切り口とした地域との交流事業を踏まえ、日常からつながる提案をいただいた。
- ケース報告2 「一人ひとりの生き方が変われば、社会が変わる」 遠山昌子さん
新たな社会のしくみや役割を課題当事者とともに創造する、インクルーシブデザイン思考の考え方や「BOUSAI & ふくしの観点」の具体的なケースの紹介があった。防災食の試食や障害のある人への理解啓発といった活動から、知り合い理解し合うこと、楽しみながらともに時間と空間を過ごす様子が伝わってきた。

● ケース報告3 「三重県における『災害時外国人住民支援事業』を中心に」 上原ジャンカルロさん

職場で災害時外国人支援事業を担当し外国人防災リーダーズ育成研修などを手掛けながら、自身が住む地域の自治会でも防災訓練に取り組むなど、外国人住民の地域防災への参画や、外国人を要配慮者から支援者にする試みの紹介があった。情報支援ツールの例や、外国人住民への広報の難しさなども聞くことができた。

● ケース報告4 「多文化防災ネットワーク愛知・名古屋」 玉城エリカさん

言語や文化、国籍の違いに関わらず、誰もが「防災」に関心を持ち、災害時には互いに支え合うことができる「多文化防災」に向けたネットワークを紹介いただいた。ご自身の外国人支援活動などももとに、外国人は支援されるだけではなく支援する側にもなること、防災ゲームなどの具体的な取り組み紹介があった。

● 参加者自己紹介

様々な地域からの参加者全員で、このテーマとの関わり・関心について自己紹介を行った。

● コメンテーターコメント 「ケース報告を聞いて」 明城徹也さん

JVOAD は、被災地支援における行政、NPO、ボランティア等のセクター間連携を目指している。コメントでは、障害者、外国人ともに支援団体に情報が入りにくく支援が後回しにされがちとの指摘があり、当事者の安否確認や支援を届けるための工夫について、事例発表者とのやりとりが行われた。

● 体験コーナー（防災ダンス・多文化防災ゲーム）

当事者とともにできるダンスやゲームを体験した。防災ダンス「心配性ヒーロー♪」は、障害者とともに踊れるよう一緒に作りあげたとのこと。また、事例を YES NO で答える多文化防災「TABO ゲーム」は選んだ理由の多様性を知ることが大切との話だった。楽しくインパクト強く「五感に働きかける」方法を体験できた。

● ディスカッション「当事者とともに、防災に取り組む道筋を考えよう」／これからに向けて

「自分が取り組めることは？」をテーマに、報告者も含めた3グループで、20分のディスカッションを行った。それぞれの持ち場での取り組みへの意欲、また、報告者への質問など活発な時間となった。全体で共有したのち、登壇者の感想コメントと、防災ダンスの「シ」のポーズでの記念撮影で、分科会をしめくくった。



● 3つのポイント ●

- ・「つながる・接点・顔の見える関係」
やっぱり顔の見える関係をつくること、つながるためにはまずは接点を持つ（つくる）
- ・「心があって、答えがある」
体験したTABOゲームでは、参加者が答えを選ぶ理由にはそれぞれの心があって、どれも間違いじゃない。
話すこと、聞くこと、伝えること（当事者からも、お互いに！）
- ・「楽しむ！」
楽しいと参加しやすくなるし、続けられる。防災、障害者、外国人、なんとなく遠慮しそうな壁も楽しいと低くなる！

参加者の声

障がい者と外国人の課題、有効な取り組みについて知ることができた。共通点が多く一緒に取り組めることがあるのではないかと考えた。／災害についてだけでなく1人ひとりと向き合い、そこから考えていくという原点を考える機会となりました。／取り組み紹介、意見交換ととても勉強になり、かつ楽しく参加できました。防災に限らず、楽しくインパクトのある発信をして、いろいろな人を巻き込んでいけたらと思っています。

分科会担当者のコメント

災害時要配慮者、障害のある人、外国にルーツのある人という「入り口」の先には、やっぱり「その人」を知ることにつくる！という、コーディネーターにとって最も大切なことを確認する機会になりました。

分科会担当者

鹿住貴之（JUON（樹恩）NETWORK）／菊池哲佳（多文化社会専門職機構）／遠山昌子（生き方のデザイン研究所）
運営サポート：榎本朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

A5

12月17日(土)

若者×地域

若手フリーランスに聞く！「コーディネーターとは？」

コーディネーターと名の付く職業や職名、働き方が溢れている現代。若年層の特徴に、一定期間、地域で集中的にコーディネーションを行い、任期満了後、また別の地域や職場に移り活動する「流動性の高い存在」としての側面がある様に思います。この分科会では、ボランティアコーディネーションの定義を確認しながら、若年層で越境を意識している3名の活動に照らして考えます。また、参加者同士の意見交換の時間を確保し、今後どのようなコーディネーターが求められ、そのようになるにはどうしたら良いかを、共に学びほぐす時間とします。

登壇者

鼎談者 森山 円香さん（元 神山つなぐ公社 理事・ひとづくり担当）・・・まどかさん
大塚 光太郎さん（たかた☆ゆめキッチン／ライフリンク）・・・こうたろうさん
松村 幸裕子さん（共奏学舎 事業評価コーディネーター）・・・さゆっぺさん
ファシリテーター 土崎 雄祐さん（とちぎ市民協働研究会 専務理事）

タイムスケジュール

参加者数

13:30 開会・オリエンテーション・チェックイン
（参加者自己紹介）
13:50 ボランティアコーディネーションの定義解説
14:00 鼎談①自分史語り・対話①自分史語り(自己紹介)
14:50 鼎談②あなたが考えるコーディネーター3要素は？
対話②自分の実践に当てはめて考えてみよう
15:50 鼎談③あなたが考える夢、今後のチャレンジは？
対話③感想・「コーディネーター的に生きていく」には？
16:30 まとめ・閉会

16 名

分科会の内容

本分科会では、ボランティアコーディネーションの定義を共有しつつ、コーディネーターとしての在り方について、鼎談と対話（雰囲気づくりとしてアバターの利用や名前を読んで欲しい名前に変えるなどしている）を行った。鼎談中も参加者からの質問に答えながら進んだ。本報告書では鼎談を中心に記載している。

●ボランティアコーディネーションの定義「4つのポイント」「8つの役割」解説

「4つのポイント」は①ボランティア（活動）の意義を正しく認識していること、②多様な人や組織が対等な関係でつながれるようにすること、③多様な人や組織を調整して新たな力を生み出せるようにすること、④一人ひとりが市民社会づくりへ参加できるようにすること、と解説を受け、今回、分野が異なるコーディネーターとしても共感できる部分があるのではないかとお話を頂いた。

●鼎談①自分史語り（フリーランスに至るまでと主な活動について）

まどかさん：岡山、福岡、島根、東京、徳島など、多様な地域での生活経験があり、学生時代、休学をし、教育委員会と公営塾でインターンを実施。様々な大人に出逢ったことが契機となり、教育 NP0 の支部を設立した。学生時代の活動から卒業後、NP0 に就職し、居場所作りや子ども向け学習支援を実施。その後、徳島県神山町で学校と地域をつなぐコーディネーションを展開した。高校生も含めて地域の高校の在り方を考える場を作った。

こうたろうさん：大学時代は埼玉におり、NGO 団体のインターンや喪失体験をした子どもたちのボランティアを経験。東日本大震災を契機に学部教授陣が復興支援のプロジェクトを立ち上げたので、リサーチアシスタントとして、関東から東北へ向かう学生のチームビルディングを含め、現地の人々と繋ぐコーディネートをしていた。この活動を機に、岩手県陸前高田市に転居し、現地コーディネーターやNP0 職員、地域食堂代表などを経験している。

さゆっぺさん：中学生の頃からボランティアとしての存在を認識し、市民活動の楽しさを知り、リーダー経験等をしてきたが、調整役の方が得意なことに気付き、その結果、現在は、肩書いろいろ、取締役、理事、非常勤職員などをしている。その中のひとつに「事業評価コーディネーター」があり、特に非営利セクターで

「評価」に取り組む時の伴走支援や知識や資源の仲介など、状況を整理する仕事をしている。

●鼎談②あなたが考えるコーディネーター3要素は？

まどかさん：《1》踏み込む《2》場を整える《3》青写真を描く

こうたろうさん：《1》多様な視点をもつ《2》多様な視点をもつために繋がる《3》楽しみつつ内省する

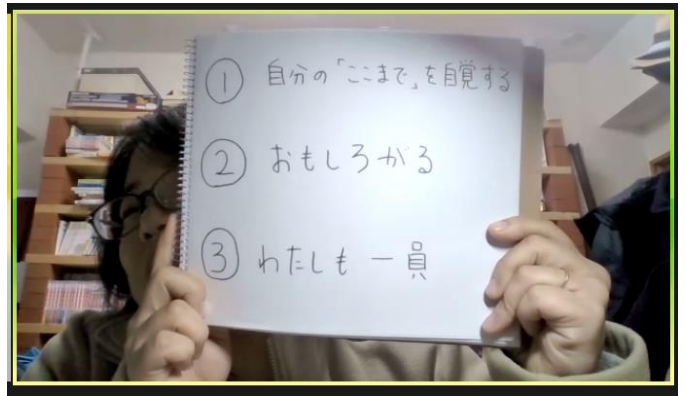
さゆっぺさん：《1》自分の「ここまで」を自覚する《2》おもしろがる《3》わたしも一員

●鼎談③あなたが考える夢、今後のチャレンジは？

まどかさん：市民社会へのアプローチ、アンテナを張りながら生きていきたいと感じている。社会の根源部分を考えると暗くなってしまうが、気持ちのバランスをとりながら暮らしていきたいと思う。

こうたろうさん：色々なことに挑戦していきたい。言葉にすると、拠点として、限りなく中にいるけど、外の人を紹介したり、外から風を入れたりするような存在として、時々に応じて役割を展開していきたいと思う。

さゆっぺさん：子どもも生まれたので、この子が大きくなった時の社会がどうなっているのかを考えたりする。あんまり頑張りすぎずにいきたいが、日々生きている中で誰かと誰かを繋げたり、情報提供したりしたいと思う。子どもの成長と共に様々なフェーズでやりたいことをやっていきたいと感じている。



参加者の声

- ・今就活中なので、卒業後の進路を考える上でプロのお話は非常に参考になりました。フリーランスという働き方は、自身の意志と責任で仕事をしていくということだと思いますが、組織に属していても自分が何をしていきたいかを考えることは重要だと気がきました。
- ・組織の中でその中で疲弊しながら何ができるのかという視点で大変参考になることが多々ありました。

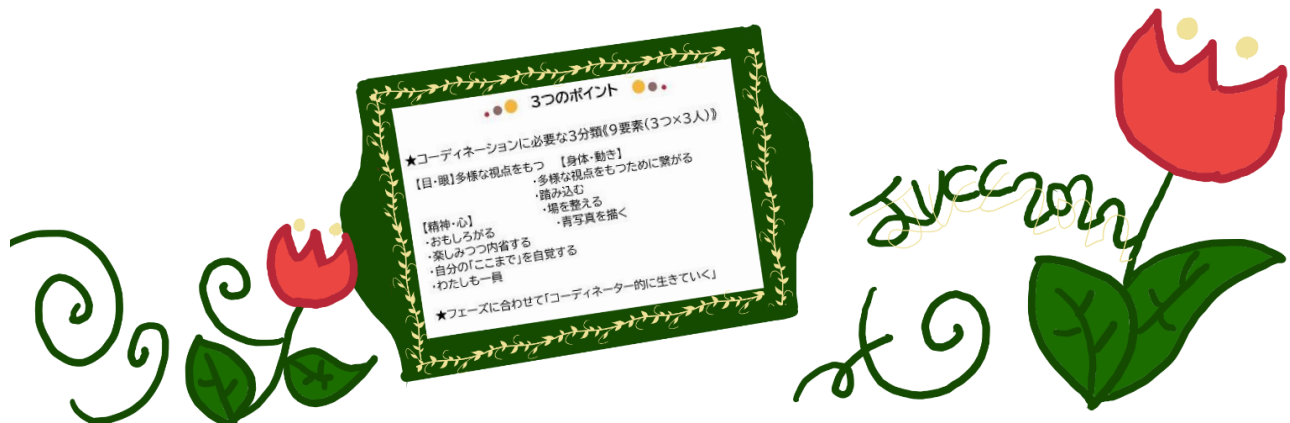
分科会担当者のコメント

皆さんからチャットに沢山のコメントを頂き、内容盛り沢山の分科会にすることができました。「コーディネーター的に生きていく」という言葉、様々な分野の方と対話・越境・共創しながら実現していきたいと思います。

分科会担当者

仙波愛優佳（和光市社会福祉協議会） / 藤掛素子（明治大学ボランティアセンター）

運営サポート：宮城智広（鶴ヶ島市社会福祉協議会）



A6

12月17日(土)

行政・制度へ働きかける

ソーシャルアクションの「工夫」と「課題」を持ち寄ろう

コーディネーターに寄せられる相談は、現行の制度や仕組みでは対応が難しいものが含まれます。想いのあるボランティアによって支えられるだけではなく、コーディネーターが提言をして、制度や仕組みをつくっていくことも大切です。しかし、行政や制度への働きかけは、簡単ではありません。

分科会では、皆さんが取り組んでいるソーシャルアクション・行政や制度への働きかけについて、「工夫」と「課題」を持ち寄り、それぞれの実践から学びます。これから行政・制度へ働きかけを行いたいという人も、参加いただき、一緒に解決策を考えましょう。

※参加者には所定のシートにて自身の実践事例の情報提供を呼びかけ、4名の方から提供戴きました。

登壇者

コメンテーター 阿部 陽一郎さん（中央共同募金会 常務理事・事務局長）

話題提供 佐藤 正枝さん（日本社会福祉士会 地域包括ケア推進委員会委員
/ 委託型地域包括支援センター 管理者）

進行 上田 英司さん（日本 NPO センター 事務局次長）

タイムスケジュール

参加者数

- 13:30 オープニング・参加者自己紹介
- 13:45 ソーシャルアクションの定義及び問題意識の共有
- 14:10 話題提供、質疑応答、コメンテーターコメント
- 15:00 休憩
- 15:15 二つのブレイクアウトルームに分かれて
 - ①各2名の参加者から事前に提供戴いた事例紹介
 - ②意見交換
- 16:15 まとめ
- 16:30 終了

12名

分科会の内容

●問題意識と定義の共有

冒頭進行役から、私たちは目の前の課題に対して、制度の中だけで解決しようとしていないか、アドボカシー活動の事例が少なく実践を学ぶ機会が少ないのではないかと、行政資金を受け取っている場合行政や制度への働きかけに遠慮があるのではないかと、当分科会の問題意識が説明された。また、ソーシャルアクションの定義として、高良麻子著『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル「制度からの排除」への対処』より「生活問題を体験している当事者へのエンパワメント理念に基づいたアドボカシー機能を果たすために、政策・制度を含む構造的変化を想定し、市民、組織、立法・行政・司法機関等へ組織的に働きかけるソーシャルワークの手法である」と紹介。

●コメンテーターの問題意識と示唆

中央共同募金会で行っている助成事業とその3ヶ年助成の終了後、「行政に働きかける」という言葉をよく聞くが、実際にどのように働きかけていくかの具体性については長年課題であると感じていた。どんな運動であれ、殆どの財源が地方分権の中で、交付税措置により国費支出され各自治体での枠組みで行われている昨今、自分の町では取り組みがないが、隣町では実施しているということが当たり前になっている。地域性が濃く、また仮に制度ができたとしても、自分たちが望んでいることなのか複雑な様相を呈している状況に触れた。ゆえに自治体ごとにアプローチ方法が細かく異なることが示唆された。根本にある人間の尊厳が大きなポイントになってくることが提起された。

●話題提供 取り組み実践事例「委託型地域包括支援センターによる地域ケア会議を通じた行政への提言」

個別のケースから個別の生活課題を解決に向けていき、地域との接点において課題が生じていることを発見した場合に、地域の中の資源開発を行ったり、政策提言を行うために、個別地域ケア会議を積み重ねて、圏域レベルの地域ケア会議を通して地域の課題を話し合う取り組みが業務委託されている。その取り組みの中で、

市民と課題を共有したり、どうしたら解決できるか話し合ったり、何を行政に提言していくか、ソーシャルワークにおけるアドボケイト実践として協議の場をつくり行っている。市民レベルで解決先を引き続いて協議していく事案については、社協に委託されている生活支援コーディネーターと連携し、協議の場を引き継いでもらうこともあったり、医療関係者との調整が必要な事案については在宅医療介護連携支援センターとの連携の下、その後を引き継いでもらうこともあったり、多様な連携の下で社会資源が充実していくことを働きかけている現状を伝えた。その過程で生じている、合意形成の在り方や、ニーズ調査の在り方、有償ボランティアの価値に関する違和感を吐露。それでも、ソーシャルアクションで重要なのは、「このままではいけないと問題提起に突き動かされたままではアクションは持続せず、否定形の語りは敵対と排除を引き寄せる」（『ソーシャルアクション！あなたが社会を変えよう』木下大生・鴻巣麻里香編著より）を胸に粘り強く諦めない実践を行っている。多様な参加者からの質疑を受け、行政が提言を受ける仕組みを確立していることや、行政と対等に現場の声を遠慮なく伝えていく姿勢（カラー）など環境に支えられての活動であることが深められた。

コメンテーターより、高齢分野では地域ケア会議があるように、例えば外国人受け入れについてもかなり前から地域の住民を含めたプラットフォームをつくることは国から言われており、行政の中で分野を超えて俯瞰した形で住民とともに進めていくことが求められており、コーディネーターとしてそこに参画していくことの必要性の確認と、難渋している移送の問題については黒部市の先行事例の紹介もあった。

●ブレイクアウトルーム 二つに分かれて以下の参加者から持ち寄り事例の紹介後、意見交換を行った。

1 グループ：住民参加型の取り組みに公民館の活用を提案した事例、地域猫の問題に関する市民活動へのサポート、行政からの意向で高校生に関わってもらう場合参加者の主体性を大切にしたい関わりについて紹介。その後、意見交換から、市民に問題を知ってもらう努力や情報の共有が同じ熱量で臨むためにいかに重要かを確認した。

2 グループ：NPOへの支援活動に関する制度提言に関する事例、開催要項を作成するようなオフィシャルな会議ではない意見交換の場をつくり、つながりを作る工夫について紹介された。



●コメンテーターによるまとめ

参加者みんな、しなやかでしたたかであることが確認できた。共通していたのは誰を向いて仕事をしていくのか、ここからスタートしなければいけないと言うことが確認できた。個別支援で精一杯の時に、制度をどうやってつくっていくのかを1人で考えていくことは難しい。プラットフォームの大切さを実感。歴史を紐解くと専門職も行政も住民の生活の場に入り住民自身の気づきを大事にして制度にしてきた、そのプロセスは今も変わらないことを確認した。

参加者の声

- ・具体的な事例が多く、実践的に役立つもので、学びが多かった（学びしかなかった）
- ・話題提供者やグループワークの事例、失敗例などもありとても勉強になりました。「しなやかで、したたかな」あきらめないコーディネーターでいたいと思います。
- ・私が思い描いていた内容と異なっていたが、行政を動かすためには、強い思いと人とのつながりが大事だと感じました。
- ・持続可能な活動をするためのポイントをいろいろ考えることができました。

分科会担当者のコメント

- ・話題提供という形で自分自身のソーシャルアクションの実践を振り返り、深め、皆様との意見交換を通じて付加すべき視点を学ぶことができて有益でした。ありがとうございました。
- ・参加者の方に事例を持ち寄っていただき、ソーシャルアクションの実践を学ぶことができました。個別支援とともに、ソーシャルアクションに調整していく重要性を再認識した分科会となった。

分科会担当者

上田英司（日本NPOセンター） / 佐藤正枝（日本社会福祉士会）

運営サポート：小柏博英（福井市社会福祉協議会）

A7

12月17日(土)

コーディネーターとしてどう「機会」を提供していくか？

～背中を押す方を考えよう～

「機会があれば参加したい」という声をよく聞きますが、どのような「機会」があれば参加につながるのでしょうか？興味関心や問題意識はあるのにもかかわらず、実際の参加につながっていない層に、私たちはどう働きかければよいのでしょうか？これまでもそれぞれの現場で、背中を押してみたり、ハードルを下げてみたりしてきましたが、なかなかうまくいかないことも少なくないでしょう。コーディネーターは、行動することの喜びや面白さ、奥深さをどのように表現し、求められている「機会」をデザインしていくべきでしょうか？この分科会では、改めて参加と参画の「機会」を提供することについて再考し、それぞれの現場での実践へとつなげていく場とします。

登壇者

コメンテーター 川中 大輔さん（シチズンシップ共育企画代表／龍谷大学社会学部准教授）

事例発表者 杉浦 健さん（三田市・市民活動推進プラザ サポートスタッフ）

開澤 裕美さん（中央大学ボランティアセンター・コーディネーター）

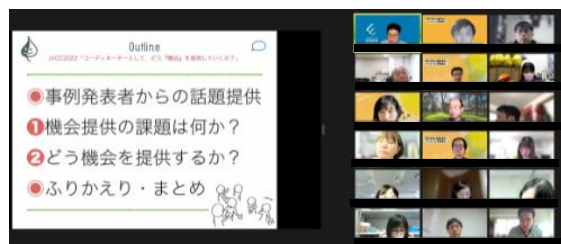
進行 鹿住 貴之さん（JUON(樹恩)NETWORK 事務局長）

タイムスケジュール

13:30 オリエン、趣旨説明、スケジュール、登壇者紹介
 13:40 チェックイン：自己紹介、参加動機
 ブレイクアウトルーム①
 13:50 話題提供（15分×2）
 14:20 グループワーク1
 ブレイクアウトルーム②（それぞれの課題を出し合う）
 14:50 休憩
 15:00 全体共有、川中さんコメント
 15:20 グループワーク2
 ブレイクアウトルーム③（解決策を探る）
 15:50 全体共有
 16:05 振り返り（個人&グループ）
 ブレイクアウトルーム④（明日から実践したいこと）
 16:25 企画者からコメント / 終了

参加者数

36 名



分科会の内容

コーディネーターとしてどう「機会」を提供していくか？というテーマで、まずはグループに分かれて自己紹介と参加動機を話した。その際、大きく2つのテーマに分かれて(①ボランティアには関心は持っているが、ボランティア・プログラムの参加に至らないグループ、②単発的なボランティア活動には参加するが、継続的な参加はしないし、運営面には関わらないグループ)、今日はどちらに重きを置いて考えていきたいかを参加者を選んでもらい、進行していった。その後、開澤さんと杉浦さんより、この2つのテーマについての「あるある事例」を挙げ、この後のグループワークで自身の業務においてどんな事例が考えられるかヒントとなる事例を紹介してもらった。その後、グループワークを2回行い、自身のテーマにおける課題を出し合い、休憩を挟んで解決策を考え、全体共有の後、感想と明日から自身が持ち帰って実践したいことを話して終了した。

● 課題を出し合うグループワーク

グループワーク1では、30分時間を取り、Google Slideでメモを取りながら進行した。①の参加に至らないグループで出た意見としては、ボランティアが他活動と比べての優先度が低い、参加するまでのイメージがわからない・正体がわからない、ボランティアの魅力が伝わっていない、どういう人を何を目的に募集しているかのストーリーがない、一度参加すると次々としなければいけなくなるのではという不安がある、具体的な「やりたい」ニーズに合っていない、など様々な視点でうまくいかない原因が考えられた。

②の単発的にしか活動しないグループで出た意見としては、思ったより大変だった、私生活との両立が不安、一つのことにとたくさん時間をたくさん割きたくない、先の見通しが見えにくいので選ぶことに不安がある、大人たちが楽しい姿を見せられていない、などの課題が出た。

● 川中さんコメント

休憩を挟み、解決策を探るグループワークを行う前に、川中さんより下記のような視点をいただいた。

・学生・生徒の場合、現在ではボランティアの他に、アルバイト・PBL 型授業・インターン・社会起業やグループ設立・オンライン活動などといった様々な選択肢があり、それぞれメリット・デメリットがある。それらと比較して合理的な選択を彼ら／彼女らはとっているのが現状である。仮に合理的な判断のもとでボランティア活動参加を非選択しているのであれば、ボランティアはそれだけのメリットが見いだされていないのではないのか。

・ボランティアだからこその奥深さや味わいを私たちは伝えられているのだろうか。そして、伝え方で工夫を凝らしているだろうか。また、1 歩目の「起動」と 2 歩目以降の「継続」のエンジンをきちんと捉えられているのだろうか。1 歩目は熱心に手引きするが、2 歩目以降の手引きは心もとなく、また卒業の節目の下り階段もきちんとガイドできていないのではないのか。2 歩目以降の支援では、目の前の相手と一定の信頼関係を築き、丁寧な「声掛け」と「手引き」を行うこと、「好きなこと・できること・やりたいこと」に合う活動をタイミングよくつないで、待機状態にしないことも求められるのではないのか。

● 解決策を探るグループワーク

グループワーク 2 でも、同じく 30 分でじっくり話し合ってもらった。①の参加に至らないグループで出た解決策としては、元の関係性を活かして仲間でやっていく雰囲気づくり、参加するまでのイメージがしやすい情報発信、参加するまでのイメージと実際の違いを埋める、義務感を達成感に、一人ひとりが役割を持ち充実感を得られるように、参加後のメリットが想像できるように、やりたいと思った時にすぐにできるように色々なプログラムを用意し常に引き出しを準備する、などの意見が出た。

②の単発的にしか活動しないグループで出た解決策としては、初めの一步で参加者同士が交流しその後も参加する動機に、1 歩目にあわせて 2 歩目の声掛けを工夫する、小さい参加の形を多様に創る、次の出番を創っておく、などの意見が出た。



参加者の声

- ・いい話だけれども、じゃあ具体的に現場でどうアクションしていけばいいかということが曖昧なまま終わる研修もある中、今回は具体的にこれをこうしていこう！とすぐに着手に向かえるような気づきをいただきました。ありがとうございました。
- ・グループワークでは、3 人と少人数のグループでお話ができただので、集合形式よりも密度の濃いお話が出来た気がします。地域の方と上下関係でなく、同じ目線でいられるコーディネーターになりたいと思いました。
- ・話し合う内容についての講義があり、それについてブレイクアウトルームで、少人数で身の丈に合ったジブンゴトの意見交換がたくさんできた。また、他のグループの話聞かせてもらい、様々な意見について知ったことが大きな収穫でした。
- ・日頃のコーディネーションの課題点のふりかえりにとても役立った半面、やはりオンラインでの情報共有の限界を感じ、若干、もの足りない面を感じた。

分科会担当者のコメント

今回の分科会は、日頃コーディネーターが業務に向き合う上で関心度が高いテーマだということが改めて認識できた。ボランティアで得られるメリット・デメリットがどのようなもので、それを具体的にイメージしやすく参加者に伝えられておらず、そこへの解決策が大きな宿題として得られた分科会であった。

分科会担当者

杉浦健(三田市・市民活動推進プラザ サポートスタッフ) / 鹿住貴之(JUON(樹恩)NETWORK)

開澤裕美(中央大学ボランティアセンター)

運営サポート: 大藤毅(国立大洲青少年交流の家)

B1

12月18日(日)

協創を生み出す技術(コツ)を考える

まだまだやるよ。生協×社協シリーズ

これまで、この分科会では相互理解が越境の素地になり、活動を生みだすカギになり、協力関係を継続的に維持するためには組織間の関係づくりが不可欠なため、その方法について具体事例に基づいて確認してきました。

第3回目となる今回は、過去の分科会で見出した視点や協創を生み出すために必要なフレームワークなどの技術が、他の事例でも活用ができるかを参加者とともに検証し、協創を生み出す技術(コツ)について考えました。

登壇者

事例発表者 徳永 雄大さん(長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター 主任)

中谷 隆秀さん(長野県生活協同組合連合会 事務局長)

新宅 太郎さん(吹田市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター)

馬場 徳二郎さん(大阪よどがわ市民生活協同組合 組織部)

進行 熊谷 紀良さん(東京ボランティア・市民活動センター 統括主任)

コメンテーター 藤井 智生さん(生活協同組合コープこうべ 第2地区本部 マネジャー)

小藪 真彦さん(西宮市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター)

ファシリテーター 文珠 正也さん(日本協同組合連携機構 連携推進マネジャー)

タイムスケジュール

参加者数

09:30 開会、前2回の報告から抽出ワードを共有

10:05 事例報告1 長野(長野県生協連×長野県社協)事例、質疑

10:30 事例報告2 大阪(大阪よどがわ市民生協×吹田市社協)事例、質疑

内訳：会場5名、オンライン9名

11:00 ワークショップ、各グループ報告 (12:30 閉会)

14 名

分科会の内容

● 分科会の趣旨(文珠さん)

この生協×社協分科会は、今年が3回目では今回は総括の回となる。「実践事例を聞いて『よしやってみよう』と思っても、実際には事情が各々違うのでうまく活用できない」「窓口の関係ができて、どちらかが異動してしまうと担当者間の温度差ができてしまう」「組織と組織のつながりはどう作ればいいか」そんな悩みに「連携のコツ」をお伝えすることで、日常の取り組みに役立ててもらおう、というのがこの分科会の目的。分科会では、「コツをキーワード」として参加者へ提供し、長野の取り組み事例で練習をした後で、大阪(大阪よどがわ市民生協×吹田市社協)の取り組みを聞いて「連携のコツ」がどのような場面で活かされたかを参加者と考えるワークショップを通じて「協働を生み出す技術」を参加者とともに確認したい。

● 長野事例(中谷さん、徳永さん)

長野県生協連と長野県社協のつながりは、長野県災害時支援ネットワーク(Nネット)で出会ったことに始まった。現在は月1で熱い議論をしている。いちばんの核となっているNネットのキッカケは、生協が災害支援で役割を発揮できるようになるために関係団体を知る機会を持ちたいとの思いから。最初に、長野県と県社協と県NPOセンターに声をかけて、災害支援団体の交流会を企画・開催した。一緒に協働で準備を進める時に大事にしたことは、それぞれの組織の風土(テンポ感や事情など)を知り理解することや、話し合いで相互に約束したことはお互いに実行すること。約束の果し合いは相互理解と信頼につながり、広い意味での友愛が生まれると感じている。長野の場合、中谷さんの熱い思いがあり、中谷さんをハブに関係ができた側面はあるが、やはり初めの一步は「まずは声をかけてみる」だ。それは誰にでもできること。顔の見える関係も大事だが、何かを一緒に協働で取り組んだ経験があるともっと強い。協働作業の中で相手の人間性から組織が見える、愛情があふれてくる。それがモチベーションに変わる。平時からのつながりが信頼感に、その信頼感がスピード感につながる。

組織間の結合の安定には協定締結も有効。協定締結ではプロセスとタイミングが大事だと思う。今年は生協連と県社協が共催でボランティアコーディネーション力3級検定セミナーを実施し実施し、全国に先んじた活動になった。連携や協働からは新しいエネルギーが生まれる。自分にはないネットワークや自分にはない考え方はお互いの組織の力になる。生協と社協はつながっていないことの方が不思議だ。つながった方が楽しいし、力も何倍にもなる。

● 大阪事例(馬場さん、新宅さん)

2016年に「地域ケア会議」のグループワークで知り合った。大阪よどがわ市民生協(以下生協)は福祉レンタルの

宣伝、吹田市社協(以下社協)は新たな取り組みができるのではないか？というお互いの思惑があった。知り合っただけではなく、あえて冷却期間を作って社協から連絡した。生協は過去の経営危機の影響で地域との関わりが薄くなっており、改めて地域との関係づくりを進める例が作れそうと思った。生協と社協でお互いに値踏み・腹の探り合いも持ちつつも、関係を詰めて行った。その後コロナ禍で大学生の窮状が社会課題になり社協では生協からの寄付金(災害支援積立金)を活用して「学生応援プロジェクト(食材支援)」を開始、生協は仕分け作業のスペースや組合員にフードドライブのよびかけ、社協はフードドライブ受取/食材受取場所を施設連絡会と調整するなど多職種・他業種連携で取り組んだ。また、生協の新入職員研修に社協職員&地域の福祉委員会にも参加いただいている。過去・現在・未来とつながる中でコーディネーションすることが必要と感じる。

● 両事例へのコメント(小藪さん、藤井さん)

巻き込むために「愛情」は必要。社会課題に対するジレンマや怒りがないと「愛」が生まれない。熱い思いを持つこと。お互いに気づかせあえる存在なのがいい。初めて生協職員研修を社協で実施させてもらった(小藪さん)。

共通の目的、生協と社協は定款的にはほぼ一緒。「同じことを言っているのに言葉が違うこと」が多いので、うまく翻訳して、同じことをやっているということを理解しあえると良いと思う(藤井さん)。

● グループワーク：3グループに分かれ、協創を創るためのキーワードその背景について話し合った。

【グループ1】共通の場を、言葉をそろえる、共通の話題で巻き込み巻き込まれる。ボランティア活動は仕事でやるとドライな関係になる。対等じゃないと愛が生まれない。【グループ2】動いてみないと始まらない、内部の調整も大事だ。ことが起こってからは「ゆるい」つながりができなくなるので、平時からの関係が大事。扉をたたいた後の冷却期間、「愛」は重すぎるから「友愛」かも。【グループ3】相手を変えるより自分を変える、相手を知って自分を伝える。対話を。支援力は受援力、自分が困っていることも伝える、トライアンドエラーが大事。

● 登壇者のメッセージ

つながることは楽しい(藤井さん)。「キーワードで考える」ということで、ワークが難しいのではないかと心配したが、すごくヒントになった(小藪さん)。千日回峰行満行者の言葉「若いウチはパワーで乗り越え、歳を取ると技術で乗り越えられるようになるが、技に溺れることも」。パワー・技術も大事だが「なぜ取り組むのか？」とシンプルに考えて実践を(新宅さん)。参加者に次世代を担う若い方がいて良かった。組織作りのコツは「ブロックよりも石垣が強い」。石垣は大きさがそろっていないが、小さな石を間に噛ませることでしっかりする。この小さな石の役割が重要かと思う(馬場さん)。相手をきちんと理解するのが重要。いつも考えている人が組織にいることが大事、愛が大事(中谷さん)。協働は仕事の枠を超えてしまうもの。ボランティアスピリッツが大事。熱い気持ちが仕事の枠を超えることを大事にしたい(徳永さん)。



参加者の声

アンケート回収7枚(50%)でした。【満足度】大変満足 71.4%、満足 28.6%、【理解度】とてもよくわかった 71.4%、わかった 14.3%、普通 14.3%、【お役立ち度】とても役に立つ 57.1%、役に立つ 42.9%。

◎吹田の試みが誇らしかった。新宅さん勇氣、馬場さんの挟む小石の必要性などを考えさせられた。◎自分事として実践に移す形まで落とし込めたことが非常によかった。今回もこんなに仲間がいて心強い。◎一歩踏み出せるような気持ちになった。つながることは楽しい。◎キーワードを軸に話し合い考えるというやり方が面白く、話しやすかった。安定の長野事例や西宮に加えて、新たに吹田の取り組みをご紹介いただき、刺激になった。

分科会担当者のコメント

◎ワークショップの熱心な意見交換を見ていると参加者の創意工夫や努力がよくわかった。今回提供した連携のコツを意識することで、日常の課題解決に何かしらお役立ちできたら光栄だ。◎「生協と社協でどんなことができるのだろう」からはじまった分科会を続ける中で、きっかけ、想いや組織についてお聞きし、今回、一歩踏み出すためのことばを一緒に考えることができた。◎生協と社協は越境し、対話し、協創できると確信した。この分科会も3回継続したように、粘り強く続けることが大切。◎「人間同士が仲良し関係になるのと同じ」なんだなと思った。まずは勇氣を持って話してみることから始めたい。

分科会担当者

鹿住貴之(JUON(樹恩)NETWORK) / 蔦直宏(日本生活協同組合連合会) 運営サポート:唐木理恵子(紬ワークス)



“被災者支援とは何か”を、 コーディネーションの視点から考える

～目の前のことへの対応と先を見据えた一貫性のある支援～

近年、災害が頻発化・激甚化する中で、被災者への支援は行政だけでなく、民間との連携が重要視されています。国の防災基本計画においても、「行政・NPO・ボランティア等」の三者連携という文言が記載され、その「活動調整」を担う“中間支援組織”の役割も重要性を増しています。この分科会では、多様化するコーディネーション場面において求められるコーディネーターの役割を確認するとともに、被災者支援のためのコーディネーションにおいて大切にしたい視点と達成すべきゴールイメージを共有します。

登壇者

講師 明城 徹也さん（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク〔JVOD〕 事務局長）

事例発表者・コメンテーター

篠原 辰二さん（Wellbe Design〔ウェルビー・デザイン〕 理事長）

浅野 幸子さん（減災と男女共同参画 研修推進センター 共同代表・プロジェクトコーディネーター）

進行 後藤 麻理子さん（日本ボランティアコーディネーター協会 理事・事務局長）

タイムスケジュール

参加者数

09:30 担当者：後藤からオリエンテーション・趣旨説明
09:35 参加者自己紹介（名前・所属・分科会の参加動機）
09:50 基調講義 明城徹也さん
10:20 実践報告1 篠原辰二さん
10:40 実践報告2 浅野幸子さん （11:00 -休憩-）
11:10 質疑応答・意見交換
11:23 グループワークのテーマと進め方の説明
11:25 グループワーク（ブレイクアウトルーム）
11:55 全体共有
12:15 一言ずつまとめ 12:28～ 事務連絡～終了

8 名

分科会の内容

被災者のニーズはどこにあるのか。一括りにしていないか。声にならない、取りこぼされてしまうニーズを掴むためには、どのような視点をもって、どのような態勢で支援にのぞむことが必要なのか。それがこの分科会の中核においた問いである。はじめにこの分科会の担当者でもある明城徹也さんから各地の被災地支援の実情と積み上げられてきた知見および課題意識、さらに議論の素材として JVOD が 2022 年の 2 月に発行した『被災者支援コーディネーションガイドライン』の骨子を紹介いただいた。これをふまえて、篠原辰二さんから地元で起きた震災時支援の実践報告をいただき、さらに浅野幸子さんからはジェンダーの視点からの防災や被災者支援について話を伺った。

■被災者支援のための行政・社協・NPO/企業等の連携の必要性とコーディネーションの役割(明城さん)

東日本大震災での反省もふまえ、熊本地震の際に展開された NPO 等による支援と多様な主体が参加する火の国会議という場を通して見えてきた連携支援の形が、国の防災基本計画にも反映された。支援関係者間の活動支援や活動調整のイメージのバラつきやコーディネーションへの認識を深め、より具体的な連携の仕組みをつくるために JVOD では、『被災者支援コーディネーションガイドライン』を作成した。都道府県域を意識したガイドラインに加えて、「家屋保全」「子どもの支援」「食と栄養」の各論も公開している。

ガイドラインでは、被災者支援コーディネーションの定義を、1. 連携を促進する機能、2. 全体像を把握する機能、3. 活動を支援する機能、4. 課題を解決するための調整、の 4 つの機能に整理。この機能が発揮されることにより、被災者の尊厳ある生活を営む権利や、支援を受ける権利が確保され、被災者の苦痛を軽減するために実現可能なあらゆる手段が尽くされることが可能となる。さらに行政や社協と連携してこの機能を中心的に担う災害中間支援組織が、全国各地で、県域・区市町村域、あるいは分野ごと（災害支援の 14 分野 ①在宅 ②避難所 ③応急仮設住宅 ④災害公営住宅 ⑤職と栄養 ⑥子ども ⑦物資 ⑧保健医療福祉／要配慮者 ⑨外国人 ⑩ペット ⑪家屋保全 ⑫暮らしの再建 ⑬コミュニティ支援 ⑭生業）にカバーしていくことが必要である。

■北海道胆振東部地震における被災者支援のためのボランティアコーディネーション(篠原さん)

平成 30 年に発生した北海道胆振東部地震の時にどのようなボランティアコーディネーションが行われたのか

についてガイドラインに沿った形でお話しいただいた。胆振東部地震は局地的と言われながらも実は広範囲に被害があり、人口比率で言えば大変多くの方が亡くなったり、生活の場を奪われた。篠原さんは、発生当初から独自の支援活動を行い、その後長期的な支援活動を行う 10 の支援団体とともに、災害時の中間支援組織である「北の国災害サポートチーム」を結成して活動してきた。ここでは災害支援の 14 の支援分野に沿って、当時の写真を投影しながら具体的な事例が紹介された。

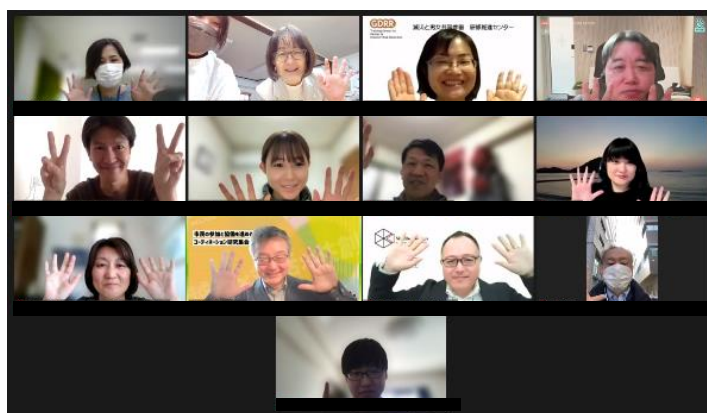
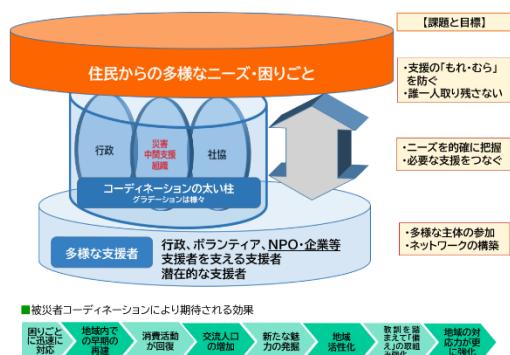
被災者支援の仕組み自体は、発災時にボランティアをはじめとする民間の支援団体や企業が応援に来たり、法律や制度を活用しながら国や自治体からの様々な支援がされることになる。しかし、すべての人が自分から助けてと言えるわけではなく、生じてくる支援の差や潜在しているニーズを見つけて、確実に多様な支援主体（ヒト・モノ・カネ・情報）の支援につなげていくことが必要。さらに「支援につなぐ」ということとともに、「資源をつくる」ことが被災者支援の仕組みには不可欠で、この両方の機能をしっかりと結び付けるといふ形のコーディネーションが必要になってくると話された。被災地における情報を整理・分析しながらフェイズの変わり目をよみ、被災者と支援者（団体）との対等な関係性の実現を目指し、被災者の自立を阻害しないというコーディネーションのポイントも紹介された。

■ジェンダー・多様性視点による被災者支援～災害ボランティア活動上の課題とその対応（浅野さん）

大きな災害時の避難生活においては女性特有の困難さや防犯を含めた環境や安全、社会生活面での課題がある。先進国のなかでも、日本は家庭における家事やケアの役割が女性に偏っており、避難生活においてもその構造的な問題は解決されず、男性役員が中心となる避難所等ではむしろその傾向は強くなる。運営側に女性がいないことも珍しくなく、生活に不可欠なニーズを表明しにくくなる。ライフラインが滞り、家事や家族の世話は重たくなり、DV・性暴力やハラスメントの問題もおきている。避難所だけでなく、災害対策本部、復興計画策定など、災害の過程の意思決定の場に女性が少ないという現実がある。これでは性別や立場によるニーズの違いはなかなか見えてこず、適切な支援につなげることは難しい。

避難生活において家庭生活や介護などの知識や経験のある人が意思決定の場に入らなければ、実際の支援の質は上がらない。ジェンダーの問題は分野や各論ではなくすべての領域に関わるものだが、個別に取り上げないと潜ってしまうものでもあり、浅野さんからはここが難しいとの指摘があった。これらの困難に向き合い、改善に向けて取り組んでいくことが必要だが、徐々に連携や協働が確立されてきた災害支援のメインストリームのなかに男女共同参画センターや女性支援団体などがつながりきれていない現状と課題も挙げられた。

被災者支援のコーディネーション「地域」×「分野」へのアプローチ



参加者の声

- 日頃の業務では見落としがちな視点から、多角的に考える貴重な機会となった。ありがとうございました。
- 男女センターとしても、防災事業に取り組む一事業としても、こうした活動に平時から取り組む多くの団体の存在とその活動内容を知ることができたことは、大きな収穫。非常に勉強となった。平時からつながりを持つ方法を考えたい。

分科会担当者のコメント

- 「被災者支援コーディネーション」は、その役割・機能だけでなく、多様性への配慮など、各地の関係するコーディネーターの皆様と継続した議論が必要であり、共通認識を醸成して取り組みを進めていきたい。
- 災害時に顕在化するジェンダーに関わる問題の多くが、平時からの構造的な矛盾や課題であることを認識し、防災・減災の取り組みに際しての視点に置くことが重要と感じた。

分科会担当者

明城徹也（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク [JVOD] ）
 後藤麻理子（日本ボランティアコーディネーター協会 [JVCA] ）
 運営サポート：石川陸矢（東京都立大学大学院）



「学生の成長」と「地域貢献」を どうコーディネートします？

学生、大学、活動の場の相利を目指しまひよ

教育機関である大学に設置されたボランティアセンターでは、社会の問題を発見し、解決に向けた行動をすることを通して、学生が人間的に成長することを目指しています。また、学生の社会参画を通して地域作りに貢献することにも取り組んでいます。「学生の成長」と「地域貢献」。この2つの目的、目標を達成するためにコーディネーターはどのようなプログラムや学生の参画を計画すれば良いでしょうか。本分科会では、最新の研究による問いに向き合って、実践者の立場からコーディネーションのあり方を検証しました。

登壇者

コメンテーター・事例発表者 川田 虎男さん（聖学院大学ボランティア活動支援センター アドバイザー）
 事例発表者 山崎 智文さん（京都産業大学ボランティアセンター ボランティアコーディネーター）
 開澤 裕美さん（中央大学ボランティアセンター ボランティアコーディネーター）
 ファシリテーター 小原 宗一さん（北区社会福祉協議会（東京都） 地域福祉係長）

タイムスケジュール

参加者数

09:30 開会・オリエンテーション
 09:40 事例発表（川田虎男さん・山崎智文さん・開澤裕美さん）
 10:20 グループワーク① 参加者自己紹介・参加者の課題共有
 10:50 全体共有
 11:00 休憩
 11:15 参加者の課題と研究報告、事例報告からの課題整理
 （川田虎男さん）
 11:30 グループワーク②
 矛盾に立ち向かうコーディネーション実践のアイデア
 11:55 全体共有
 12:30 まとめ・閉会

32 名

内訳：会場 16 名、オンライン 16 名

分科会の内容

最初に、大学ボランティアセンターに所属する 3 名より、「学生の成長」と「地域貢献」の両立を目指す上で、理念と現実の間でのボランティアコーディネーターの葛藤や矛盾をテーマに、事例報告を行った。その内容を受け、グループワークにて参加者の課題を共有した。休憩を挟み、参加者の課題と研究報告、事例報告から、川田さんより課題整理を行っていただいた。それらを踏まえ、2 回目のグループワークでは、矛盾に立ち向かうコーディネーションの実践アイデアについて話し合った。そして最後に、ご自身の研究報告とグループワークで出された意見を合わせ、川田さんよりコメントをしていただいた。

● 事例報告

まず、川田さんからは、「大学ボランティアセンターのコーディネートに関する学生の成長に寄与する研究報告」として、「学生の成長＝教育的機能」が期待される大学ボランティアセンターについての解説があり、続けて、ボランティア活動による活動者自身への影響、学生ボランティアで注目される教育効果について、先行研究なども含めてご紹介いただいた。続いて、山崎さんからは、京都産業大学ボランティアセンターの紹介とともに、ボランティアセンターの取り組みを紹介し、体験的な参加者が増える中での入口支援の課題についての話があった。活動参加のきっかけづくりを重点に企画を実施するも、なかなか実際の活動参加につながりにくい現状があり、学生の事情を考慮しつつも、学生と活動をつなぐコーディネーションや魅力ある企画づくりをどうしていくかに悩みながら日々模索しているという課題を共有した。そして最後に、開澤さんより、中央大学ボランティアセンターの紹介に加え、NPO 法人で働いていた頃をふりかえり、現状と比較した話題提供を行った。NPO では、地域のニーズを一番に考え、ワークの質重視で活動を組み立てていたが、現在は、「学生の成長」も重視しつつ、いかに「地域貢献」と両立していくかに悩みながら、ボランティアプログラムを創っているという話があった。

● グループワーク①

オンライン、リアル会場それぞれで 3～4 人のグループに分かれ、1 回目のグループワークを行った。グルー

プでは、自己紹介を行った後に、参加者同士でそれぞれが抱える課題を出し合った。グループワークで出た意見は、全体で共有できるよう、スプレッドシートに入力してもらった。その後、全体でいくつかのグループからどんな課題が出たか共有する時間を持った。

● グループワーク②

1 回目のグループワークで出た課題を解決するために、どのようなコーディネーションを実践していけばいいか、アイデアを出し合った。その後、グループで話し合った内容を全体で共有した。

〈矛盾に立ち向かうコーディネーション実践のアイデア〉

- ・自分が必要とされていることを伝えてもらえること、リコグニションをそれぞれが改めて意識する。
- ・体験した学生が学生に伝える
- ・大学生として、という肩書き抜きに、ひとりひとりの個人として向き合う、コミュニケーションが大事。
- ・社協とはつながっていても、社協から教えてもらった団体のこととかはよく知らなかったりする。連携が深められるとよい。
- ・学生側、受け入れ側どちらにも意識のすり合わせをコーディネーターがする必要がある。
- ・自分の中にある前提を疑う。
- ・学生自身のボランティアに対するイメージが逆に活動参加のハードルを高くしている。身近なところで困っている人がいて、こんな活動ができるということを示して、ハードルを下げる。
- ・受け入れ側としては継続的な活動を期待している。ふりかえりの場を持つことが大事ではと感じた。ボランティア参加者が言語化し落とし込むことで、結果的に継続につながっていくのではないか。
- ・現場のことをもっと担当者が知って学生に伝えていきたい。何の目的で活動をしているのかを丁寧に伝える。

● まとめ

「学生の成長」と「地域貢献」は強欲だけど両立し得ると考えている。それを実現するためには受入側と送り出し側の丁寧なコミュニケーションが必要であり、そのための場づくりと人づくりを意識的に行っていきたい。



参加者の声

- ・同じような立場で頑張っているメンバーが全国にいることを知れて、勇気をもらいましたし、また頑張ろうと強く思えました！この繋がりを大切にしたいです。
- ・学生のボランティアは継続的な活動には結びつかなくとも、社会人になったときにボランティア活動を思い出してもらえればよいなど新しい視点に触れることができました。
- ・大学のボランティアセンターの方と共感できたり、受け入れ側の方のご事情をお伺いできたり、デスクに向かって仕事しているだけでは得られない時間でした。

分科会担当者のコメント

事例報告から、人間形成や職業選択にも大きな影響をもたらすことがある青年期のボランティア活動をめぐって、大学側の視点では実社会での活動体験を通じて学びや成長を得てほしいという期待があり、地域の側からはある種のマンパワーとして若者に様々な期待を寄せているという現状が確認できた。大学と地域のコーディネーター両者のディスカッションからは、両者の間に生じる前述のギャップを埋めるためにそれぞれの立場で、あるいは協働してどのような相互理解やコーディネーションの工夫ができるかを考える機会となり、今後の取り組みに向けて多くのアイデアが提案された事がこの分科会の成果であった。

分科会担当者

小原宗一（北区社会福祉協議会） / 開澤裕美（中央大学ボランティアセンター）

山崎智文（京都産業大学ボランティアセンター）

運営サポート：國實紗登美（龍谷大学ボランティア・NP0 活動センター） / 土田恭仁子（宇治市社会福祉協議会）

橋詰勝代（高島市社会福祉協議会） / 長谷部治（神戸市社会福祉協議会）

B4

12月18日(日)

地域を基盤にした協働のネットワークづくりを進めよう

～ 実践事例から考える、地域のこれから

地域社会をベースに、多様な市民・住民団体や NPO などが連携して、市民・住民が主体となって、地域の課題を解決し、豊かな地域の暮らしを創造していく多くの地域で、その模索が進んでいます。しかし地域には、多様な歴史と特色をもつ既存組織がそれぞれに活動を積み重ねています。いずれも自団体の運営に追われ連携などをする余裕もないなど、その展開は容易ではありません。この分科会では、このテーマに取り組む実践事例を共有し、多様な地域で、その地域にあった展開を進めるための鍵を探りました。

登壇者

事例発表者 戸田 幸典さん（丹波ひとまち支援機構 代表理事）

栗原 穂子さん（ぼらんたす 理事）

コメンテーター 竹端 寛さん（兵庫県立大学 環境人間学部 准教授）

全体進行 杉浦 健さん（共働プラットフォーム）

プログラム進行 早瀬 昇さん（大阪ボランティア協会 理事長）

タイムスケジュール

参加者数

- 09:30 開会、趣旨説明、登壇者紹介、スケジュール説明
- 09:35 事前アンケートの紹介（ぼらんたす・佐藤美恵さん）
- 09:45 グループ協議①「みんなのモヤモヤを共有する」
- 10:05 グループディスカッションの共有
- 10:15 事例紹介① 戸田さん・丹波ひとまち支援機構
- 10:50 事例紹介② 栗原さん・ぼらんたす
- 11:25 7分休憩後、質疑応答/竹端さんから深掘り質問
- 11:50 グループ協議②「これからどうする？」
- 12:05 グループディスカッションの共有
- 12:20 セルフワーク「モヤモヤがどう変わった」
「明日からの挑戦」をスプレッドシートで共有
- 12:25 登壇者・コメンテーターのコメント
- 12:30 終了

29 名

内訳：会場 9 名、オンライン 20 名



分科会の内容

コメンテーターの竹端さんの提案で「モヤモヤトーク」により、それぞれの問題意識を起点とする参加者主導のプログラムとした。事前アンケートで参加者の「モヤモヤ」を聞きとり、冒頭グループディスカッションでそれぞれのモヤモヤを深め、事例発表と深掘り質疑。その後、再度グループディスカッションで個々の問題認識の変化と今後の対応を共有し、最後にスプレッドシートで明日からの抱負を書き込み、まとめのコメントで終了。

●「事前アンケート」の紹介

「行政主導の弊害」「多様な団体・組織の連携・協働の難しさ」「住民主体で課題解決を進めるきっかけづくり」「担い手不足・高い負担感」「地域課題を人任せにしない工夫」「深刻な実情」などのモヤモヤを共有した。

● 最初のグループ協議「みんなのモヤモヤを共有する」（モヤモヤトーク）

「連携しようという前提が共有されていない」「深刻な高齢化などの脅しっぽい説明で支え合いを求めても、住民の意欲が高まるのか」「団体間で活動観に温度差がある」「多岐にわたる課題でも地域から出てくるのは同じ方々ばかり」「若者も参加する場でも年配者などの声が通りやすい」……などのモヤモヤが共有された。

● 事例発表① 兵庫県「丹波ひとまち支援機構」の実践（戸田幸典さん）

人口減少、年齢構成、家族の形、地域の姿が、これまでとこれからで全く異なり、社会の仕組みをデザインし直さないといけない。行政が住民の力に期待する今を、自治や公共を取り戻す時代と主体的に捉えたい。そこで、丹波「社会的つながり」プロジェクトを展開。多様な人々が参加する交流会で協働の場づくりを進め、調査研究で地域特性や専門職関与の必要性を確認した。地域支援者として住民の主体性を引き出すために「誘う力」「ファシリテーションの技術」「調査研究や論理的思考」「見せ方」



「政策提言力」が必要。学びの場を共有し、住民自治組織、行政、企業にコーディネーター的人材を増やしたい。

● 事例発表② 山形県「ぼらんたす」の実践（栗原穂子さん）

「ないものは作る」精神で、ボランティアコーディネーター研修の開講を手始めに、障害があっても安心して暮らせる地域づくり、素人目線で自殺予防などに着手。県から自殺予防サイトの委託を受け、保健所とも連携。県の補助で、自由な交流拠点「楽家(らくや)」を開設し、子ども食堂を開催。2市3町の子ども食堂、子ども支援団体とネットワークも立ち上げ。大学と連携した人材養成にも取り組む。ぼらんたす自身がプラットフォーム。多様な人々が集うことでワンストップに対応できる。人まかせにせず、地域の課題に目をつぶらない、見ないふりをしない人を増やすため、「気づく→学ぶ→実践→ふりかえる→気づく出会いの場」を作ってきた。



● 竹端さんから事例発表者の2人に深掘り質問

竹端：2人は住民をお客さんにせず、学びから自分事化し、自治を取り戻す姿勢が共通点。

しかし、形だけの「やっているふり」連携も良くある。ほんまものの連携との違いは？

戸田：お互い個人同士としての関係を作れ、言いたいことを言える関係になっていること。

栗原：公務員は組織の看板を背負いがちだが、個になると本音に。だから、あきらめない。

竹端：個に依存して、「あの人だからできる」ということになってしまいかねないが……？

戸田：逆に個が良いと思う。あなたしかできない、という人をいかに増やすかが鍵だ。



早瀬：面白い市民はこだわりが強いが、それは自負心。各々自信をもって良い場を作り、かつ排除しないことが大事。

竹端：しかし、「船頭多くして、舟進まず」という「俺が俺が」状態で、リーダーシップが分かれてしまうと困るのでは？

戸田：それぞれ専門領域を持ち合っていることを認め、自分の船を持っている人たちの船団として動けるイメージ。

栗原：若いメンバーが想定を超えた企画を作って、それぞれにグループ結成…ということも。それを止めてはダメ。

● 2度目のグループ協議「これからどうする？」（「参加者の声」で一部を報告）

● セルフワーク「モヤモヤがどう変わった」「明日からの挑戦」をスプレッドシートで共有

● まとめのコメント

戸田：地域の対話の場に入り、地域の人たちが自分事として、何でも喋れて当事者意識を持てる場作りが大事。

栗原：組織は個々でできている。個を大切にしつつ、組織として連携・協働することが、やはり大切。

竹端：私を深掘りし、私の課題に高め、危機感を持ちつつも、地域でおもしろい何かを創り出すことを進めたい。

参加者の声（の、ほんの一部）

- ・テンポのよい質疑応答はすごく刺激的。「やったふり連携じゃないか?!」を問う姿勢を持ち続けたい
- ・当事者性をいかに高めるか、方法や関わりを考えていきたい。その中で自分がどう関わっていくかも考えたい
- ・組織の中で組織内の価値観に縛られていたと気づいた。個人のつながりから始めることが次のステップになる

分科会担当者のコメント

- ・アンケートは満足度、理解度、役立ち感とも高評価で、ご登壇者・ご参加の皆さんに感謝です。参加者主体の「モヤモヤトーク」で、自らの気づきを起点に、明日からの変化につながる場になったと安堵しています。

分科会担当者

栗原穂子（ぼらんたす） / 佐藤美恵（ぼらんたす） / 杉浦健（共働プラットフォーム） / 戸田幸典（丹波ひとまち支援機構）

早瀬昇（大阪ボランティア協会） / 法橋 聡（丹波ひとまち支援機構）

運営サポート：佐藤匠（至学館大学） / 石黒健一（社会福祉士事務所うら和） / 竹脇恵美（長野県長寿社会開発センター木曽支部）

B5

12月18日(日)

多文化共生×地域福祉

「共生社会の実現に向けて、外国人住民とつながりをつくるには

外国人住民の地域での受入れの取り組みは、必要性は感じて「きっかけが作れない」という声も聞きます。国際交流協会等の多文化共生分野、社会福祉協議会等の社会福祉分野、また、NPO等の分野間の重なりとつながりを活かすことで、できることがありそうです。まず、国際交流協会と社協の日常的な関わりや、コロナ禍を契機としたフードパントリーの活動等、分野を超えて協働する事例を聞き、社会福祉にアクセスしにくい外国人住民を支えるネットワークの形成やコーディネーションのヒントを参加者ともに考えました。

登壇者

事例発表者 山野上 隆史さん（とよなか国際交流協会 事務局長）

村松 清玄さん（シャンティ国際ボランティア会 国内事業担当）

モデレーター 妻鹿 ふみ子さん（東海大学健康学部教授/日本ボランティアコーディネーター協会代表理事）

進行 矢富 明德さん（佐賀県国際交流協会）

タイムスケジュール

参加者数

09:30 趣旨説明、オリエンテーション

09:40 事例報告①「とよなか国際交流協会の取組から」

事例報告②「東京都豊島区における外国人支援」

10:40 休憩

10:50 モデレーターとともに「共生社会の実現に向けて、外国人住民とのつながりをつくるには？」を深める

11:30 参加者によるグループディスカッション

「おふたりの話を聞いて…はっけんベスト3」

11:55 全体共有・今後につながるまとめ

12:30 終了

10 名

分科会の内容

●事例報告 山野上さん（とよなか国際交流協会）

豊中市の人口は約40万人、外国人は約6,300人いる。約30の事業をボランティア400人と運営。事業の3つの柱は、①多様な人々が尊重される地域づくり、②周縁化される外国人のための総合的なしくみづくり、③学校とつながってつくる豊かな未来。年1回、全ての事業が共通の視点（①居場所、②エンパワメント、③ボトムアップの組織づくり、④双方向性）で振り返りを行い、成果や課題を共有している。行政やさまざまな機関と連携し、外国人とつながろうとしてきたが、地域とのつながりが強い社協との連携強化ができないかと考えた。

新型コロナウイルスをきっかけに、これまでもあった社協とのつながりが更に深まった。国際交流協会とつながっているが社協とつながりがなく、また、その逆の人もいることが見えてきた。両者は住民全員が「地域で孤立せずに、安心・安全に暮らせること」「地域の一員として居場所と役割を持って暮らせること」を目指すなど、共通点が多い。社協が得意とする地域から生まれるつながりも、国際交流協会が得意とする関心や属性から生まれるつながりのどちらも大事。それらのつながりがセーフティネットになるかどうかが重要である。

●事例報告 村松さん（シャンティ国際ボランティア会）

海外支援から国内に目を向けると、国内の問題も深刻化、複雑化している。自分たちの強みを活かし、何ができるか、いっしょに実施してくれる団体や地域を探し、豊島区と縁があった。豊島区の人口は約29万人、外国人約2.7万人。特例貸付の申込み状況を見て、外国人の貧困層とつながりができていないことを認識した。

豊島区は国際交流協会もなく、公助の隙間をうめるために、専門性の高い団体が連携し、包括的な支援を行うコロナ禍における包括的緊急支援を開始した。支援の3本柱は、①アウトリーチ、②支援の実施、③支援力強化。特に支援力の強化では、外国人の仲間（ピア）にコーディネーターになってもらい、外国人が支援されるだけでなく、支援する側になる事例を地域の中でつくり、支援力を高めていくことを大きな目的にしている。

支援の流れは、広報→フードパントリー・相談会→ケース会議→個別支援となっており、これまで22回、689名が来場した。社協とも広報や個別支援、地域情報の提供等で連携している。各団体がバラバラに支援している状況をネットワーク化していくことが重要だと感じている。

●話題を深める（モデレーター：妻鹿さん）※テーマは下記のとおり

- ・外国人とつながっていったプロセス
- ・ニーズを把握し、活動を広げる方法
- ・ピアの力が発揮される現場のコーディネーターをどう発見し、どう育てているか
- ・事業資金と役割分担など

●参加者によるグループディスカッション「お二人の話を聞いて…はっけんベスト3！」

- ・支援する側、される側の垣根を取り払う
- ・外国人支援に関わる団体間で目線や歩みを合わせ、調整を丁寧にすることが大切
- ・同じ国・同じ言語だからといってひとくくりにしない、同じ文化だと思わない
- ・4つの視点（①居場所、②エンパワメント、③ボトムアップの組織づくり、④双方向性）での振り返り
- ・ロールモデルになってもらうという考え方

●登壇者・モデレーターからのコメント

- ・コミュニティに属している人も色々で、属性によってどこに参加するかも違う。どこをターゲットにするかでそこが入口にはなるが、そこをキーにそれ以外の人たちにつながるきっかけにもなっている。
- ・4つの視点での振り返りは、それぞれのフィールドで活動する団体が、自分たちの工夫や失敗、成果を共有することで、活動の意義を再確認でき、支援する側も元気になる機会になっている。
- ・社協や地域住民との意識のすり合わせにより発信の方法も変わった。外国人支援の必要性を伝えることから、外国人がいないと成り立たない日本社会の状況の共有や後期高齢者数との比較等により、身近な問題だと気づく説明方法に変わった。いっしょに何かをすることが意識のすり合わせにつながっている。
- ・自分たちの取り組みは一つの例であり、正解ではない。外国人支援の好事例があっても、そのまま援用するのではなく、試行錯誤を通してその地域なりの形を作ることが大事。複数の機関や団体に関わる時には、自分が最初に持っていた目標にこだわり過ぎず、関係者全員が60点ぐらいと思える形を目指す、成果もありつつ、次のステップや課題も見えやすく、ちょうどよい塩梅になるかなと感じている。
- ・地域はポテンシャルの塊。そのポテンシャルを掘り起こす作業を続ければ、そこに外国人も加わって、より良い地域につながっていくのではないかなと思っている。
- ・キーワードは「つながり」。でもつながり方には色々なレイヤーがあり、それを大事にしながら、段々と強いものにしていく、そのプロセスが大事。また、色々な要素や変数でつながり方が変わってくるため、いかに色々な要素をつながり方の中に入れていくのかがコーディネーションの役割や機能の重要な部分になる。
- ・4つの視点の振り返りは、評価になっており、評価したことが次につながるのですずっと続けているのだと感じた。評価することが難しい領域での評価方法を私たちも学ぶ機会になった。
- ・「多文化共生社会をつくる」ではなく、「多文化共生社会でまちづくり」という発想を持ちたい。



参加者の声

- ・自分側だけがどう関わったら良いのかと思っていたわけではなく、相手側もこちら側の様子を知りたがっているかもしれないということを知った。今後の業務の中で積極的に関わっていこうと思った。
- ・普段の業務とは分野が若干違い、聞いていてわからない部分もありましたが、国際交流にかかわる立場として、今後の日々の業務に生かしていきたいポイントがたくさんみつかりました。

分科会担当者のコメント

- ・日ごろの業務で気になっていることが分科会のテーマとなり、当日は参加者のみなさんとともに私にも大きな学びがありました。この機会意識した「つながり」を拡げていきたいです！

分科会担当者

藤井美香（横浜市国際交流協会） / 正田恵子（杉並区社会福祉協議会） / 武藤祐子（千代田区社会福祉協議会）
運営サポート：藤掛素子（明治大学ボランティアセンター）

B6

12月18日(日)

地域共生社会の実現と行政・専門職・地域住民の参画

制度の狭間を埋めるゴミ出し支援活動や市民後見活動の仕組みづくり

高齢社会、担い手不足、財政効率、多様な視点から、そのメリットを中心として市民へと担い手が拡充、支えられる側と支える側をシームレスにした形で、地域共生社会の実現を目指して進化（深化）してきています。

この分科会では、地域で生活する上で様々な支援を必要とする人の権利を擁護する立場から、生活に密着したゴミ出しの支援活動や市民後見活動の仕組みづくりに関与するコーディネーションの実践報告をもとにワークショップを展開し、必要とされるコーディネーションの視点を学びました。

登壇者

コメンテーター・進行 土屋 幸己さん（コミュニティネットハピネス 代表理事）

ゴミ出し支援活動実践報告者 齋藤 隆一さん（ふるさと奥山の荘 理事長）

オンラインサポート：佐久間（胎内市地域包括支援センターみらい / 保健師）

市民後見活動支援実践報告者 香山 芳範さん（明石市市民後見センター 主任 / 社会福祉士）

櫻井 由里子さん（明石市市民後見人）

タイムスケジュール

参加者数

09:30 開会・オリエンテーション

09:33 趣旨説明・登壇者紹介・導入

09:45 実践報告1 日常生活を支援するゴミ出し支援活動等
制度の隙間を埋める NPO の活動

10:05 実践報告1 を深める（質疑応答）

10:20 実践報告2 市民後見活動を共に創り支える活動

① 体制の確保に焦点を当てて

② 実際の活動に焦点を当てて

10:56 実践報告2 を深める（質疑応答）

11:13～25 休憩

11:25 グループワーク・発表・コメント

11:30 終了

13 名



分科会の内容

進行およびコメンテーターを担当する土屋さんから分科会開催趣旨について説明があり、ソーシャルワーク領域におけるコーディネーションといえる協働や連携、連絡調整を実践している事例として報告者を紹介した。

1 実践報告

(1)日常生活を支援するゴミ出し支援活動等制度の隙間を埋める NPO の活動

ふるさと奥山の荘は 2004 年、まちづくり・地域おこしを目的として立ち上がった団体である。団体の「できるだけ何でもやる精神」のもと、市から一度は民間委託したものの食数が少なくなり請負事業者が撤退した高齢者配食サービス事業を引受け、配食サービスの空いた時間に特別支援学校へ通学する児童の送迎（片道 20km）や放課後の日中一時預かりを始めた。その後、就労支援施設になじめない障害者のための地域活動センター運営や「助け合い事業」として施設入所者の通院時の付き添いなども開始すると、高齢者や障害者のごみステーションまでのゴミ捨てのサポートや墓地の清掃、農薬散布などの依頼を受けるようになり、ゴミ捨ては日中一時支援を利用している障害者の活動とコーディネートしながら事業を展開。市職員 OB や保護者の参加を得て進め、職員

は高齢者中心であるが制度の狭間が埋まる達成感も得られ、考えることが楽しい、と齋藤さんは語った。

★コメンテーターと深めたポイント

・ゴミ捨てという地域課題を障害者の就労支援で取り組むことはなかなかない発想であり、障害当事者が社会貢献する姿は地域の人たちにとって、障害者理解が深まる大事な機会にもなっている。

・地域包括支援センターや保健所と連携しながらフォーマルサービスやインフォーマルサービスを高齢者中心の皆さんができることをやることで、生活支援体制整備でいうところの皆さん自身の介護予防にもなっている。

(2) 市民後見活動を共に創り支える活動

①体制の確保に焦点を当てて

明石市は約 30 万人の中核市である。高齢化率 26.5%、2025 年には約 5 人に 1 人が認知症（軽度者を含むと 3 人に 1 人）になるとの予測に備え、明石市後見支援センターでは、①後見人の担い手不足②支援困難事例の増加を課題とし、弁護士・司法書士・社会福祉士等の専門職後見人アンケートを実施し「後見人就任後の後方支援」を求めていることに着目し支援体制を整えてきた。SDGs である持続可能性も意識した①後見サポーターを活用した後見人支援②専門職後見人と市民後見人の複数後見、この 2 つが特徴である。支援体制を推進するため、高齢者からの 1,000 万円の遺贈を原資にあかし後見基金プロジェクトを立ち上げ、共償活動の理念に基づき、①寄付つき商品の開発②あかしりサイクル事業という 2 つの取り組みを開始している。そのほか、香山さんは寄付つき商品として「SDGs 未来都市明石」を作曲し音楽配信を手掛けるなど多様な実践を紹介した。

②実際の活動に焦点を当てて

市民後見人である櫻井さんは、平成 28 年度に養成講座を受講、第 1 段階である理念研修を受講、第 2 段階として日常生活自立支援事業の支援員活動をバディ制度で学んだり、地域サロンに参加し地域の社会資源に触れたりする市民サポーターとしての実働を行ったのち、平成 31 年 4 月から支援員として市民後見活動を開始している。施設入所した高齢者のケースでは、親族とご本人の懸け橋のような存在になることを心がけていること、また多くの方が市民後見人を支えてくれており、安心して働ける環境だと報告された。

★コメンテーターと深めたポイント

・法的な解決を得意とする専門職後見人と金銭管理等の生活支援を中心とした市民後見人との複数後見が相互の強みを生かして効果的な取り組みとなっている。

・従来、本人の財産により上下する後見人の報酬を共償制度というわかちあいの仕組みで支えたり、リサイクル制度を立ち上げたり、資源が循環するようにしたことはコーディネーション力があってできる実践である。

2 グループワーク・発表

グループワーク後の発表の時間では「どちらの活動でも、課題を認識してから解決までのスピード感が素晴らしい。組織内合意など自身の組織に戻ってから取り組みたい」などの感想も聞かれた。最後に一言ずつ感想を述べあい、終了した。

参加者の声

課題について学び合う場はじわじわと地域を変えていくことが実践発表から実感した。/「なんでもやる」という気持ちが周りを変えていくのですね。/香山さんの必要なタスク、必要な人材を図面に落とし込んで地図を作って行くコーディネーションのお手本が学べて今後の事業のイメージが作れた。/ファンドレイザーが複数いたので、資金調達についてもお聞き出来て参考になった。など

分科会担当者のコメント

・どちらの活動にも継続や充実の根底には理念の浸透やニーズに対する真摯な姿勢があることを確認！（佐藤）

・それぞれの個人や組織の強みを生かし連携協働を生み出した 2 事例から大きな学びを得ました。（疋田）

分科会担当者

佐藤正枝（日本社会福祉士会） / 疋田恵子（杉並区社会福祉協議会）

運営サポート：榎本朝美（東京ボランティア・市民活動センター）

デジタル活用によって、参加を広げる

デジタル人材や企業、ボランティアの実践から学ぶタイトル

デジタル技術は、今や私たちの暮らしに欠かせないものとなりました。さらに、新型コロナウイルスの対策として、デジタル化がより一層進みました。今まで、移動や時間にハードルがあり、参加できなかった人たちも、デジタル技術を使い、参加できることができるようになりました。一方で、市民活動団体は知識やスキルの面で、デジタル技術の活用にはハードルを感じているところも多くあります。この分科会では、デジタル人材や企業、ボランティアの実践から、デジタルを活用した新たな参加の広がりを学びます。

登壇者

事例発表者 山崎 清昭さん (Code for Japan プログラムディレクター)

金田 晃一さん (株式会社 NTT データ サステナビリティ経営推進部シニア・スペシャリスト)

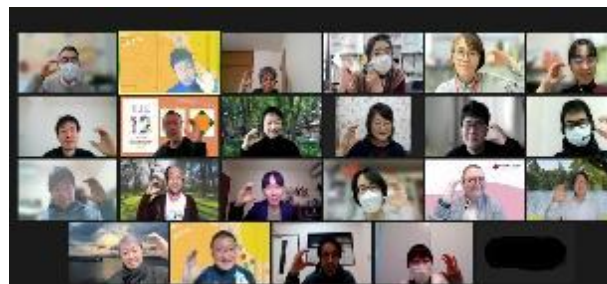
ファシリテーター 上田 英司 (日本 NPO センター 事務局次長)

タイムスケジュール

09:30 オープニング・参加者自己紹介
10:00 事例発表1 Code for Japan 山崎 清昭さん
10:45 事例発表2 NTT データ 金田 晃一さん
11:48 休憩
11:55 ブレイクアウトルーム
12:12 全体会まとめ
12:30 終了

参加者数

22 名



分科会の内容

冒頭、ファシリテーターによる趣旨説明の後、参加者は4つのブレイクアウトルームに分かれ、自己紹介と今回の期待について語り合った。続いて、山崎さんと金田さんが事例発表を行った。

● 市民参加のテクノロジーを進める「シビックテック・NPtech」とは？

山崎さんからは、Code for Japan の活動を基調に5つの柱でお話をされた。

(1) 「Code」とは、プログラミングの命令文のこと。Code for Japan という名称は、「IT を使って創造的に社会をアップデートする」という意味。「ともに考え、ともにつくる社会」には、それを可能にする「場」が必要であり、組織ありきではなく、個人が自分自身で考え、行動し、繋がることで信頼が蓄積され、社会が変わる仕組みをつくることを後押しする活動をしている。全国各地にも Code for●●(地域名)が存在している。

(2) シビックテックとは、Civic (市民) と Tech (技術) を掛け合わせた造語。それぞれの持つスキルを活かした参加し、貢献したい地域、気になっている社会課題について、地域ごとあるいは興味関心領域ごとに集う有志メンバーと一緒に考え行動する仕組みとして各地で展開している。

(3) NPtech とは、NPO と Tech を掛け合わせた造語。NPO 自らがデジタル戦略を推進、実践…とはいってもデジタルで何ができるのかわからない (知識不足)、IT 投資や人材採用の経営戦略を立てる人がいない (人材・能力不足)、様々なシーンで相談できる相手がいない (メンター不在) という課題がある中、NPO 等の非営利団体による社会課題解決の活動とデジタル活用を結び付けた革新的な動きをいう。

(4) その核となるのがソーシャル・テクノロジー・オフィサー (STO)。STO は、NPO の組織の内側に入って、経営視点から IT に関わる活用、戦略、人材戦略、投資戦略などをアドバイスし、実践を指導する人材、IT を活

用した既存事業の改善、新規事業の開発、コスト削減、IT人材の獲得、育成などを担当する。

(5) NP0のDXは、①個人としてデジタルアレルギーの克服、②組織でのデジタル活用業務の見える化と改善を検討しながら段階的に進めることが大切である。NP0とIT人材の協働は、①フラットな関係、オープンな会話、②ビジョンの共有をしっかりと、③リスペクトしながら柔軟に、④丸投げせず共に考える、⑤判断できる人が担当、⑥コスト感覚を持つ、⑦作りながら歩みよることがコツ。失敗から学び、成長する。

● デジタル・フィランソロピーSociety5.0時代の戦略的社会貢献活動とは？

金田さんからは、企業のフィランソロピーの最新の動きを基調に、4つの柱でお話しされた。

(1) デジタル・フィランソロピーでは、社会的課題解決に資するビジネスと社会貢献活動の相乗効果が期待されている。従来の社会貢献活動に「デジタル」が加わることで、社会価値(量の変化)は、社会課題解決に向けたインパクトが飛躍的に、企業価値(質の変化)は、従来のレピュテーション(評判)の向上に加え、将来の事業化を通じて収益が創出される変化が起きる。大きな企業が応援はNP0だけでなく、小さな企業の社会貢献にも起こりうる。外資や大企業は動き始めている。

(2) 特徴として、①パートナーとしてのスタートアップ企業、②社会課題解決を目的としたIT関連助成、③実証実験に対する支援、④社員によるITプロボノ活動があげられる。

(3) 実践事例として、①デジタルの享受(AI画像診断アクセスプロジェクト)、②デジタルの活用(NP0のIT活用/ST0人材を社会に創出するプロジェクト)、③デジタルの創り込み(NTTデータアカデミア)がある。

(4) 企業とNP0とのパートナーシップのコツとして、社会貢献プログラム策定の際は、6W3Hを明確にして進めることが大切である。本業を通じて社会課題を解決することを企業は意識している。全体像を見誤り費用を抑えたり、社会価値よりも企業価値を重視し過ぎる社会貢献活動が出てくるかもしれないので注視してほしい。

● ブレイクアウトルーム および 全体会とまとめ

4つのグループに分かれ、事例発表の感想、デジタル活用についての意見交換を行い、全体で共有した。

1 グループ 高齢者を取り残さない方法も考えていかなければならない。

2 グループ デジタルが万能ではない、デジタル化は地方も恩恵を受けていることを確認できた。

3 グループ 最新の企業の動きが学べた。デジタル支援を進めるため、Code for の地域団体へ参加したい。

4 グループ 企業や中間支援団体の役割の変化をものすごく感じた。



参加者の声

難しいと敬遠気味だったが、使いこなせれば世界が広がり、課題解決に役に立つことに気づいた。デジタル化の対応や活用だけではなく、企業として社会活動への関わり方の大きな変化も学べた。デジタル活用の視点だけでなく、企業とNP0の連携を生む中間支援組織の役割についても考えさせられた。地域の活動者の高齢化、大きなNP0ではない団体にデジタル面でどう課題解決に結びつけるのが難しい。日本では結果を優先し、失敗は許されない風潮。失敗の経験を重ねることが大事という考えが広がってほしい。

分科会担当者のコメント

デジタルによって、新たな参加者層の開拓や市民活動の広がりの可能性を知る分科会となった。

分科会担当者

上田英司(日本NP0センター) 運営サポート: 小柏博英(福井市社会福祉協議会)

B8

12月18日(日)

子どもの豊かな体験が大人と地域を変える！

—学びを起点とするアプローチで、多彩なつながりを創出するには？—

市民の参加と協働を促す活動には、意図的・偶発的を問わず様々な学びが埋め込まれています。また、子どもたちの学びの場は学校だけに留まらず、暮らしの至る所にそうした場が隠れています。

この分科会では、愛媛県大洲市におけるシトラスリボンの普及啓発と島根県吉賀町におけるふるさと学習を取り上げます。体験活動という形で子どもたちに働きかけを行い、彼らに加え、その周囲にいる大人たち、さらには地域社会全体に変容をもたらしている様子を確認し、そのプロセスにおいてどのようなつながりが育まれているのかを探究していきます。

登壇者

事例発表者 福本 政代さん（大洲市立平野小・中学校 地域コーディネーター）
城戸 明美さん（吉賀町教育委員会 課長補佐）
ファシリテーター 土崎 雄祐さん（とちぎ市民協働研究会 専務理事）

タイムスケジュール

参加者数

09:30	開会、趣旨説明	7 名
09:35	福本さん事例提供	
10:00	簡単な質問（土崎）	
10:10	ブレイクアウトルーム(BR)で参加者自己紹介、 福本さんへの質問&感想シェア	
10:20	質疑応答（齋藤）	
10:35	城戸さん事例提供	
11:00	簡単な質問（土崎）	
11:10	BR で城戸さんへの質問&感想シェア	
11:20	質疑応答（齋藤）	
11:35	休憩	
11:45	ワーク 1…現在コーディネーションしているケースの関係者 を書き出す	
11:50	個人ワーク	
11:55	ワーク 1 の結果と気づきをグループ内でシェア	
12:05	ワーク 2…ワーク 1 に今後つながりたい関係者を書き加える	
12:10	個人ワーク	
12:15	ワークの結果と気づきをグループ内でシェア	
12:25	まとめ	

分科会の内容

子どもに対する働きかけが周囲の大人や地域社会全体に与えた好影響について、2 件の事例報告があった。

● 愛媛県大洲市の平野中学校におけるシトラスリボンづくり

中学生が取り組むきっかけをコーディネーター（福本さん）が創出するところに端を発し、それに呼応する形で校長や市職員、自治会役員が配布先の開拓や資金確保に取り組んだ。この活動は中学生にとって参加しやすい、すなわち意義が理解しやすく、具体的な作業も取り組みやすいものであった。一方で、制作したものの配布や材料の調達といったプロセスは中学生単独では成果を上げづらい。そこで、校長や学校運営協議会委員などコーディネーターにとって身近な理解者を増やしつつ、リボンの制作にとどまらない「参加の輪」を広げていった。協力者にとっての関心事は「中学生たちの活動をどのように後押しできるか」であり、すでに走り出している活動であるとともにその担い手が子どもたちであるという点では、大人たちにとっては「後押ししない理由はない」ものである。コーディネーターは、PR も兼ね、シトラスリボンを中学生が大人たちに託すシーンを意識的に数多く作り出しているところもポイントの一つと言える。

参加者からは、中学生の「やらされ感」や幼稚園や小学校との連携に関する質問があり、大学生を含めた異年齢とのかかわりをとおして中学生がエンパワメントされていることが報告された。

● 島根県吉賀町教育委員会が中心となって取り組むふるさと学習「サクラマスプロジェクト」

地元を支える人材を長期的な視点で育成する事業である行っている同プロジェクトの背景には、若年層の深

刻な人口流出という課題がある。町内に高校はあるものの、町出身の多くの高校生は卒業後、進学や就職のため町外へ転出する。そうした状況を踏まえ、「ふるさとでの学びや体験をもとに、いつの日かふるさと吉賀町を支える人材（財）の育成」をコンセプトとして 2012 年から事業を推進している。学校等での教育に加え、子どもの地域活動の充実と町内 5 つの公民館を核とした地域の教育力の充実を目指し、地域の実態に即した様々な活動を展開している。例えば、放課後子ども教室における段ボールハウスづくりや火起こし体験、子どもたちによる遊休建築物を活用した居場所（コミュニティスペース）づくりなどが具体的な活動として挙げられる。

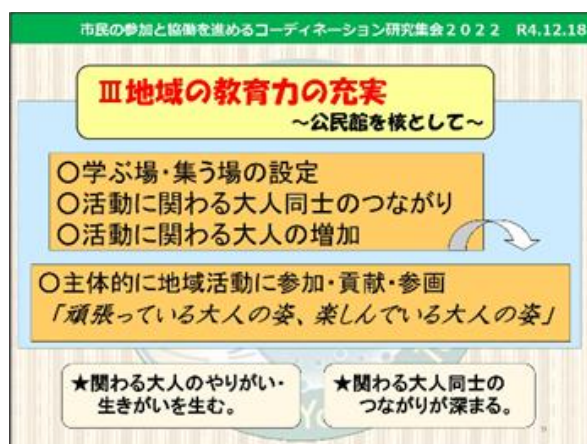
また、その推進体制として、地域内の各種団体により構成され、各公民館が事務局を担う「サクラマスプロジェクト地域会議」（2015 年設置）がある。この会議がコーディネーション機能を果たしており、プログラムの企画や講師の選定を担っている。2020 年からは「大人と子どもの協働」を通じた大人の人材育成も意図するようになった。

同プロジェクトの特徴として、子どもたちの学校正課外の地域活動について、町教育委員会によって体系的に整備されている点が挙げられる。年齢や成長段階に即した体験活動を通して、地域の魅力を知り、地域の大人と出会い協働するプロセスが埋め込まれている。あわせて、このプロセスを支える形で地域住民（大人たち）の学習を通じた地域づくりが進められている。プロジェクト始動から 10 年が経過し、サクラマスとして「大海を回遊中」の大学生からは、同プロジェクトでの体験の忘れがたい記憶や帰郷の意思が口々に語られているという。

2 件の事例報告を受け、プログラムの終盤は参加者によるグループワークを展開した。参加者自身のコーディネーション実践において「現在つながっている」あるいは「これからつながりたい」関係者を書き出し、事例報告も踏まえつつ、お互いの気づきを共有した。



発表資料(福本さん)



発表資料(城戸さん)

参加者の声

ボランティアグループの近い将来について考える機会があったが、背景には高齢化の進展がある。子どもたちを巻き込めば親たちの参加も見込めると考えていたが、子どもたちが大きくなってまた住みなれたまちに戻ってきてくれるようにとまでは考えていなかった。子どもたちの豊かな体験のためには大人たちもともに学んでいって、将来的にも地域の活性化につながるということを勉強できた。

福本さんと城戸さんのお話を聞いて、子どもに魅力をもってもらうためのアプローチや行動、そして子どもだけではなく、大人も「楽しむ」という視点を持たないといけない大切さを学んだ。

分科会担当者のコメント

今回取り上げた 2 つの事例は、いずれも子どもも大人も変容し、さらにはその総体としての地域社会も変容するという一石二鳥いや一石三鳥の取組であった。そして、かかわる大人たちは次第にコーディネーションの役割を担っているプロセスも確認できた。また、大学生等の世代間をつなぐ存在も忘れてはならない。コーディネーションの担い手が多い地域は、豊かな地域と言えるのかもしれない。参加者からは「ブレイクアウトルームでのグループワークの時間がもっと欲しかった」という声が複数上がったが、事例発表や意見交換が充実した時間であったとポジティブに捉えたい。（土崎）

分科会担当者

齋藤尚久（杉並区教育委員会） / 大藤毅（国立大洲青少年交流の家） / 遠山昌子（生き方のデザイン研究所）

明日からのコーディネーションのための 振り返りと分かち合い

“越境型プラットフォーム”の最後のプログラム。オープニングセッションと2つの分科会等を終えて、全体での振り返りとまとめの時間です。新たな学びや気づき、感じたことを話し、分かち合いましょう。今後のコーディネーションにつなげていくためにお互いの成果を確認し合いました。

登壇者

○メインファシリテーター 鹿住貴之さん（JVCA 副代表理事／JUON（樹恩）NETWORK）

<各会場のファシリテーター・オンラインサポート>

東京：熊谷紀良さん・榎本朝美さん／京都：長谷部治さん・國實紗登美さん／大阪：竹脇恵美さん・永井美佳さん

★Zoom テクニカルサポート（画面共有・ブレイクアウトルーム・スポットライト等）神保彩乃さん

タイムスケジュール（90分）

- 14:00 あいさつとクロージングの進め方説明
- 14:05 分科会報告（90秒×15分科会）
- 14:30 グループディスカッションの案内（ブレイクアウトルームでの話し合いの説明）
- 14:35 グループディスカッションⅠ（振り返り）
- 14:55 全体共有
- 15:05 グループディスカッションⅡ（明日からの行動宣言）
- 15:20 全体共有（チャット書き込みなど）
- 15:25 ファシリテーターからのまとめ

分科会の報告から（3つのポイント）

A1 東京会場 地域の中で社協が協働相手として期待されるためには？ 「どうせ社協・・・」を超えよう！	... 3つのポイント ... ・同じ景色をみる ・課題意識を共有する ・どうせ そうだ！社協に行こう！ ★これもポイント★ つかまれた・つかんだ手をはなさない
A2 京都会場 こんな時代だからこそ、 “攻めるコーディネーション” 越境しなはれ！ 逆境にこそ新時代がはじまる	... 3つのポイント ... ・言い合うは聴き合う。 ・過程があれば、失敗にはならない。 ・「越境」は、人が集まり、楽しそう なところから始まる
A3 大阪会場 オンライン えっ、その表現って、どうなの？ 言葉から考えるボランティアの価値	... 3つのポイント ... ・違和感に敏感になろう ・ボランティアの価値について、ひとり一人に心を込めて伝え続けよう ・ボランティアについて共通言語で話せる人を増やそう

A4

オンライン

防災×災害時要配慮者

当事者とともに取り組む道筋を考えよう～
障害のある人・外国人のケースから

3つのポイント

- ・「つながる・接点・顔の見える関係」
やっぱり顔の見える関係をつくること、つながるためにはまずは接点を持つ（つくる）
- ・「心があって、答えがある」
体験したTABOゲームでは、参加者が答えを選ぶ理由にはそれぞれの心があって、どれも間違いじゃない。
話すこと、聞くこと、伝えること（当事者からも、お互いに！）
- ・「楽しむ！」
楽しいと参加しやすくなるし、続けられる。防災、障害者、外国人、なんとなく遠慮しそうになる壁も楽しいと低くなる

A5

オンライン

若者×地域

若手フリーランスに聞く！
「コーディネーターとは？」

3つのポイント

★コーディネーションに必要な3分類《9要素（3つ×3人）》

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 【目・眼】多様な視点をもつ | 【身体・動き】 |
| ・おもしろがる | ・多様な視点をもつために繋がる |
| ・青写真を描く | ・踏み込む |
| ・楽しみつつ内省する | ・場を整える |
| ・自分の「ここまで」を自覚する | |
| ・わたしも一員 | |

★フェーズに合わせて「コーディネーター的に生きていく」

A6

オンライン

行政・制度へ働きかける

ソーシャルアクションの
「工夫」と「課題」を持ち寄ろう

3つのポイント

- ・「しなやかで、したたかであること」と「誰を向いて仕事をしていくのか」このあたりが、共通のスタート地点
- ・個別支援で精一杯の時にソーシャルアクションまでは…そんなときにこそ、プラットフォームの存在が大事
- ・プロセスは今も昔も同じ。生活に根ざした緻密な調査をして、問題をいかに住民と共有し、住民を動かし、行政を動かし制度をつくる

A7

オンライン

コーディネーターとして、 どう「機会」を提供していくか

背中を押し方を考えよう

3つのポイント

- ・うまくいかない原因
課題を自分ごととして捉えられていない 賛同しやすいテーマではない
一度参加してしまうと次々としなければいけなくなる
活動のイメージがしづらい かつこ悪い など
- ・どう解決していくか？
正体を明らかにする 始めの一步で参加者同士が交流
イメージしやすいような情報発信を頻繁に 参加の形を小さく多様に
コーディネーターは失敗してもいい＝上手な下手に出る
ボランティアに「期待」はしても、「当て」にはしない など
- ・ボランティア世界への「踏み入れ／踏み込み」
待機状態にしない 自発性は揮発性（早瀬 昇）
「好きなこと・できること・やりたいこと」に合う活動へ

B1

東京会場

オンライン

協創を生み出す技術（コツ）を考える

まだまだやるよ。生協×社協シリーズ

3つのポイント

- ・コツをつかみ、活かすことは大切。
- ・でも、相手を理解して、共感して、共通の目標が大切。
- ・だから、考え続ける 想い続ける愛が必要
自発性・熱い思いが仕事の枠を超える
ボランティアスピリッツ

B2

オンライン

“被災者支援とは何か”を、 コーディネーションの視点から考える

目の前のことへの対応と
先を見据えた一貫性のある支援

3つのポイント

- ・被災者(地)の多様なニーズと多様な支援主体のコーディネーションでは「支援につなぐ」とことともに「資源をつくる」ことが大切である
- ・これまでも、いまも欠けている～ジェンダーやマイノリティの視点を、当事者の参画によって加えていかなければ、支援の質はあがらない
- ・普段からのフラットな人や組織のつながりづくりが肝になるが、つながるだけでなく、社会構造への働きかけをしていくことが不可欠である

B3

京都会場

オンライン

「学生の成長」と「地域貢献」を どうコーディネートします？

学生、大学、活動の場の相利を目指しまひよ

●●● 3つのポイント ●●●

- ・「学生の成長」と「地域貢献」は強欲だけど、両立し得る！！
- ・「利己目的」と「利他目的」は近づいてくる？！
- ・送り出し側（大学）と受け入れ側（地域）のコミュニケーションを活発に！！

JVCC2022_B3

B4

大阪会場

オンライン

地域を基盤にした 協働のネットワークづくりを進めよう

実践事例から考える、地域のこれから

●●● 3つのポイント ●●●

- ・組織は「個人」でできている。個々人の「個性」を活かし、自負を活かすことが協働推進のエネルギーとなる
- ・危機感の共有を起点にしつつ、美味しい場、楽しい場づくりを心がけよう
- ・行政の期待に「やらされ感」ではなく、自治を取り戻す機会と捉えよう

JVCC2022_B4

B5

オンライン

多文化共生×地域福祉

共生社会の実現に向けて、
外国人住民とのつながりをつくるには

●●● 3つのポイント ●●●

- ・「つながる・つながり」
当事者や関係機関（国際交流協会、社協、NPO、地域の団体...）が連携する。60点満点！
- ・「当事者の視点や声」
当事者（外国人）の声から事業を行う
当事者の視点で事業を行う
- ・「多文化共生 × 「の」 → 「で」 まちづくり！」
地域のための多文化共生！外国人の力を活かす！

JVCC2022_B5

B6

オンライン

地域共生社会の実現と 行政・専門職・地域住民の参画

制度の隙間を埋めるゴミ出し支援活動や
市民後見活動の仕組みづくり

●●● 3つのポイント ●●●

- ・ニーズがあれば「なんでもやる」精神。
だからこそできないことを明確にしておく。
- ・課題対応のスピード感がどちらもすごい。
Coが協働・連携・連絡調整をしながら持続可能な「分厚い支援」をつくりだす。
- ・どちらの事例も、活動の余白をうまくつくり、市民のかかわりが生まれている。

JVCC2022_B6

B7

オンライン

デジタル活用によって、参加をひろげる

デジタル人材や企業ボランティアの実践
から学ぶ

●●● 3つのポイント ●●●

- ・デジタルの技術をもった市民や社員ボランティアの参加が大きくひろがってきている。
- ・デジタル技術を活用することで、地域や時間を超えて、参加をすることができている。
- ・デジタル技術は万能ではない。合意形成のプロセスや情報共有のやり方、コーディネーターは新たな配慮をしていく必要がある。

JVCC2022_B7

B8

オンライン

子どもの豊かな体験が 大人と地域を変える！

学びを起点とするアプローチで、
多彩なつながりを創出するには？

●●● 3つのポイント ●●●

- 学びや変容をもたらすコーディネーターの「まなざし」として
- ・子どもの成長（学びや変容）を伝えるプロセスをとおして大人も学び、変容する。
- ・大人の学びや変容に向けて、大人同士の関係のなかに同じ目線で、対等に子どもを混ぜる。
- ・同じ子どもと大人が何度も出会う機会を意図的に創り出す。

JVCC2022_B8

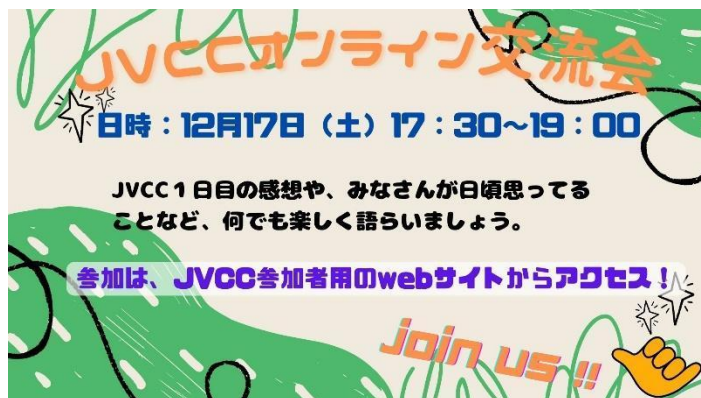
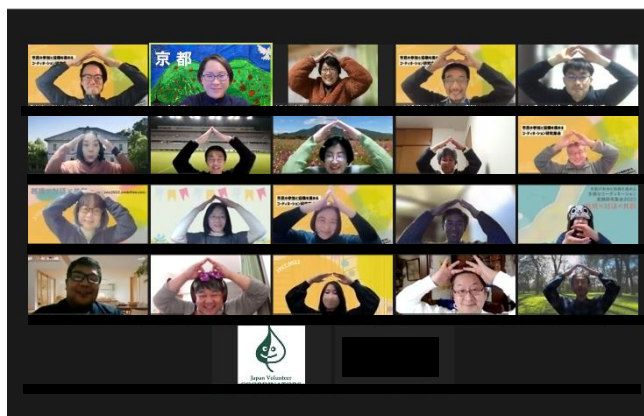
●困ったことはオープンにしてみんなで考える！／●つながりを増やすためにあきらめずに動く／●緻密な調査を設計してソーシャルアクション！／●身近な相手とのつながりを”ちょっとだけ”深く・強く意識しよう。／●明日からアクティブシニアの仲間を一人でも引っ張り出し、共にアクションを起こします！／●課題をほっとかず、連携協働の視点でアクションする／●普段の声がけを大事にする。自分としては一歩踏み込んだコミュニケーションをとる。／●来た学生に、まずはじめに「学校どうですか？」と聞く／●繋がりを大切に！／●カタチだけでない「連携・協働」を進めます！／●苦手なデジタルに挑戦！／●他者に（より）やさしくなる！／●お互いが共通言語で話せているか、きちんと確認する。／●ブレない・流されない・真の意味伝え続ける／●担い手をつなぐ通訳になるぞ！／●ことばと活動の本質にたちかえる・わかりやすい発信／●人とのつながりを大切に／●ひと手間かける 端折らない／●ITプロボノさんと繋がりたい！／●デジタル技術を使って参加を広げる事例を報告できるよう頑張ります。／●多様な視線で物事を見つめてみよう／●全国に仲間がいることを支えにボランティアコーディネートをしていこう／●目標を探してベストを尽くす、ボランティアコーディネーターを通して何をしたいか明確にする／●餅つきができるようなボラセンの立ち上げにチャレンジ／●学んだことを地域で共有仲間を増やしていきたい。／●60点満点で行こう！／●愛は持つけど空気はよまない人になろう、「ゆるさ」を大事にしていこう／●モヤモヤを共有する場をつくる。／●100点を目指さない。チャレンジ。／●多様な視点で物事を見つめ行動する／●相互理解。相手の思いを知り、共通目的・言語を／●失敗してなんぼ！／●ボランティアさんのために動きます。／●学んだことを伝える。イベント実施に繋げる。／●目の前のニーズを大切に！／●現場で汗する←行き来する→大きな仕組みに還元する／●湧き出した思いを「待機状態」にしない／●ボランティアについて共通言語で話せる人を増やす。／●今回感銘を受けたことを周りの人10人に伝える／●活動希望者をつなぐ際に、現場のぬくもりや未来の景色像を伝える／●ボランティアの無償以外の価値を伝えていきたい／●「繋がりたい！」と自己開示し、組織内外の扉をゆるくたたく！／●ボランタリーコーディネーション力検定3級を取得する／●話しやすい雰囲気作り！地域の人の話をしっかり聞く！！／●ピアサポーターを増やす！／●ボランティアコーディネーションを通して何をしたいのか明確にする。ベストを尽くす／●学生と地域のサステナブル・ディベロップメントなつながりを作る／●アウトプットする。話す、場の中に声を出す。／●過去、現在、未来を見据えてボランティアさんとかかわります。／●セクハラ行為から学生を守る／●ボランティアさんのためにベストを尽くします。／●私なりの青写真を描きます。そして、シェアします。／●モヤモヤは変化のキッカケ。モヤモヤし続けるぞ～（笑）／●自分の学びを止めない！この繋がりを今回だけにしないで次に繋げる。／●オンラインの司会はずまらなくなりがちなので…真面目な内容を真面目な顔ではなく、遊びこころを！アバターや着ぐるみを堂々と着用する！（自分もたのしい、みんなもたのしい→だからオンラインイベントでも参加する）／●勇気をもって続けること、やめること。勇気をもって新たに始めること！チャレンジチャレンジ楽しもう。／●マクロとミクロの2本立てで具体的な行動にうつす！／●人脈の棚おろし！／●コーディネーターとして自分がまずは楽しそうに！興味を持つ！／●当事者性！／●コーディネーター自身の情報を発信していく。／●課題の解決に向けて”1つの役割”を担っている人。対等な立場であることを改めて意識したいです／●災害の判断で、答えは一つではない。「心があって、答えがある（玉城さんの言葉）」分科会やブレイクアウトでお話した情報を、災害支援関係者に共有します。！！／●つながり続ける！（スッポンになる！）／●つながりを楽しむ人を増やす！

■参加者の声（アンケート結果から）

- ・ブレイクアウトセッションがすごく良い！離れていてもつながっている感が半端ありません。
- ・繋がることって大事だと感じました。2日間のことを明日から実践していきたいです。
- ・いろいろと悩み過ぎて、少し食傷気味のところもある今日この頃ですが、この2日間楽しかった！学べた！などのキラキラした笑顔の共有に、ちょっと勇気をいただきました。
- ・同じグループで2回話せて良かったです。人数が少なくてすごく話しやすかったし、悩みを分かち合えました。
- ・皆様の話が聞けて社協との関わり方などモヤッとしていたものが減りました。最後のグループディスカッションで学生さんとの関係づくりをしている方の話も聞けて参考になりました。
- ・難しいハイブリットでの開催お疲れ様でした。仕方ない事ですが声が聞こえにくかった部分がありました。
- ・参加していない分科会のまとめを聴くことができとても得した気分だった。役に立った。
- ・短時間で全分科会のふりかえりを聞くことができよかった半面、情報処理が追いつかなかった。
- ・音の調整はもう少し頑張っていたきたい。それぞれのワークの時には記録しておくべきことをチャットに書き込んでほしかったです。

12/17 参加者交流会

JVCA 運営委員の有志で、オンライン交流会を企画しました。JVCC 参加者であれば、どなたでも参加可能な交流会で、全国各地からご参加いただきました。参加者全員で、好きなおにぎりの具と 24 時間以内の印象的だった出来事を話し合う自己紹介をした後、ブレイクアウトセッションに分かれて、参加した分科会の感想共有をはじめ、自由に話し合う時間をもちました。直接お会いできなくても、オンライン名刺交換会と銘打って、クラウド上で連絡先を交換し、その場限りでない出会いの時間になりました。【参加人数：24 名】



参加者の声

- ・初めての方とも気軽に話ができてよかったです。今日参加しなかった、別の分科会についても報告が聞けて、情報交換になりました。
- ・はじめましてのつもりが、意外と接点があったりする方との出会いもあり、とても楽しかったです。分科会は、何か得たい。学びたい。と、肩に力が入りがちですが、交流会の方がリラックスして腑に落ちる学びが多かったのかも！？と思ってしまいました。

分科会担当者

鹿住貴之（JUON(樹恩)NETWORK） / 高橋義博（府中市市民活動センタープラッツ）

宮城智広（鶴ヶ島市社会福祉協議会） / 國實紗登美（龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター）

12/17-18 市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会終了～！

研究集会を単なるイベント終わらせない、学びっぱなしにしない！

ステップアップ・ミーティングの開催

■日時：2023年1月24日（火）19：30～21：30 @オンライン

■参加者：33人

集会の成果を地元に戻ってどのように生かしていくか。ワクワクして持ち帰った学びやヒントをもう一歩進めて、実践につなげていくために、お互いの気づきを持ち寄って話し合いました。参加者からは出席した分科会の感想を出していただき、運営側からは企画のねらいを紹介しながらその成果を振り返り、全体で今後につながるエッセンスを確認しました。

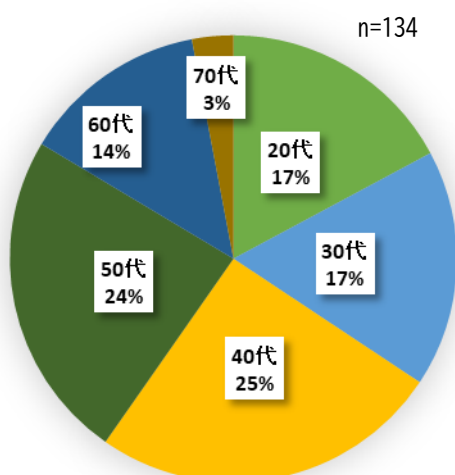
【地域展開につなげるために：地元での実践にプラスになったこと、できそうなこと】

- 登壇者に連絡を取って、地元の学習会に来ていただいた。
- ふだん関わらない分野だったが、どのように関わったらいいのかをお互いに気づけた。
- 同じ地域から参加している人がいて、終了後連絡を取ってつながっている。
- この人に頼ってみよう、聞いてみようというつながり（人脈）ができた。
- 終了後に他の地域の仲間ができ、今でもつながりが続いている。特に災害時など、その地域だけで解決はできないので、こういう広域で知り合えることがいざというときの強みになる。

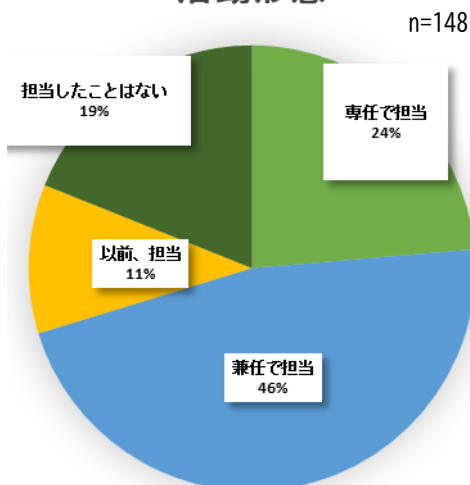


データでふりかえる JVCC2022

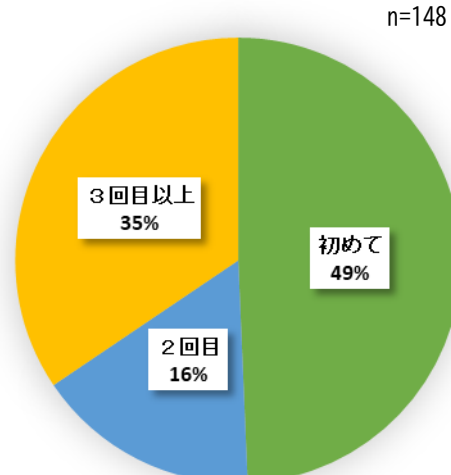
年代



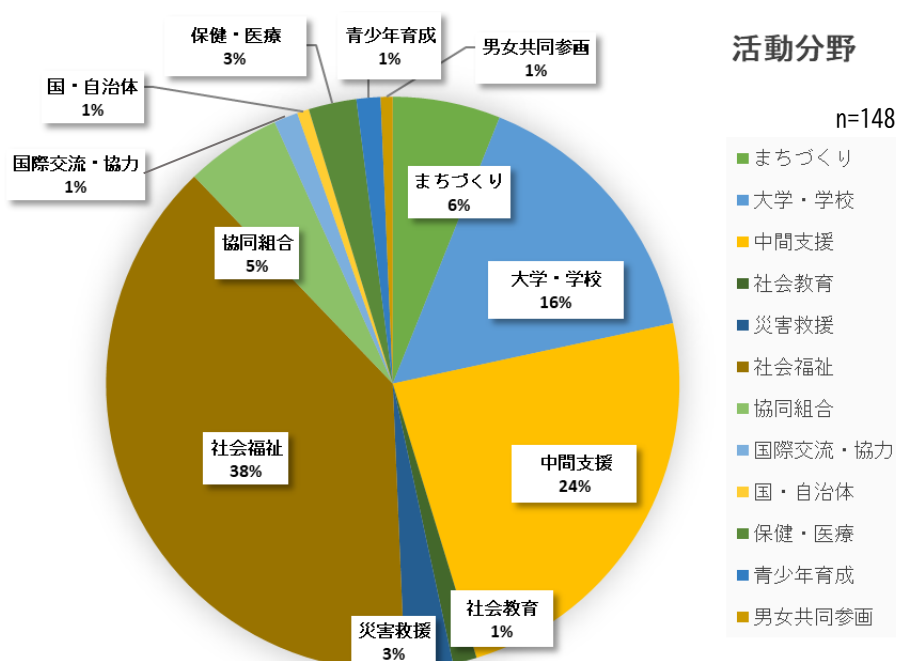
活動形態



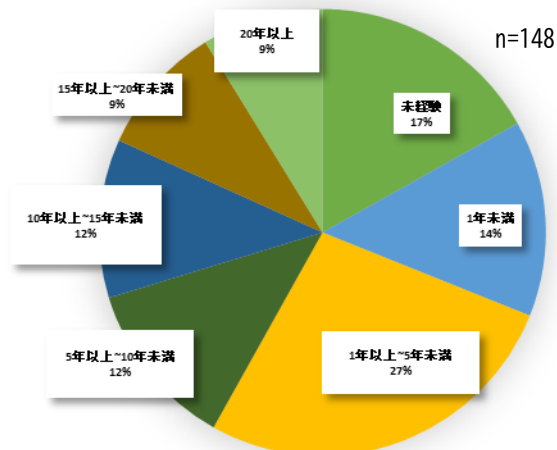
参加回数



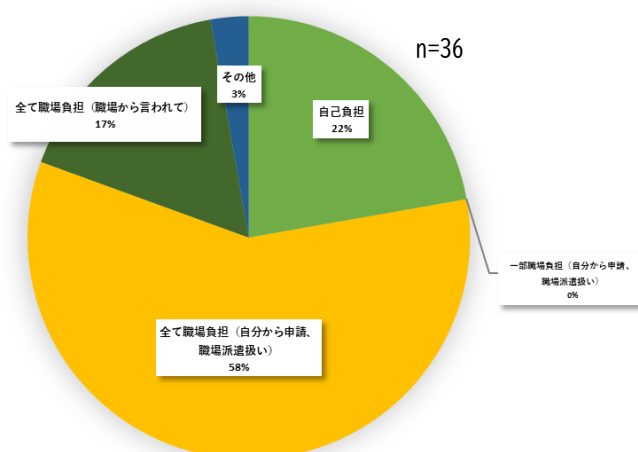
活動分野



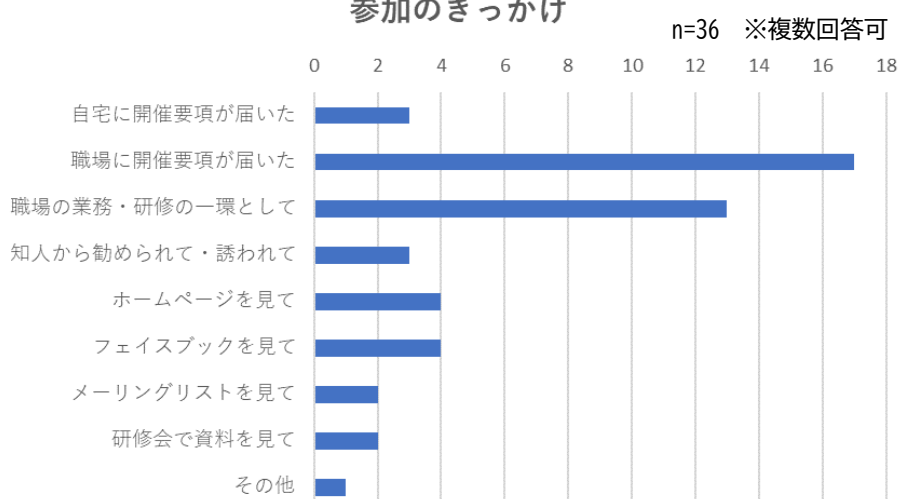
CO経験



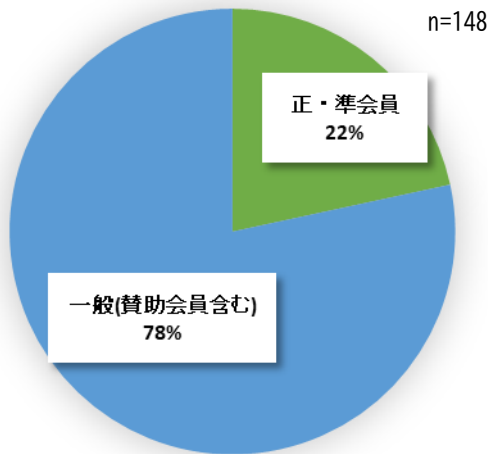
参加費負担



参加のきっかけ



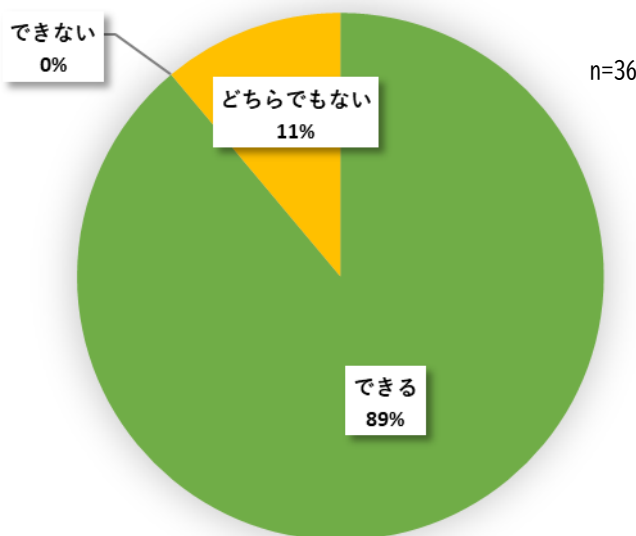
JVCA会員



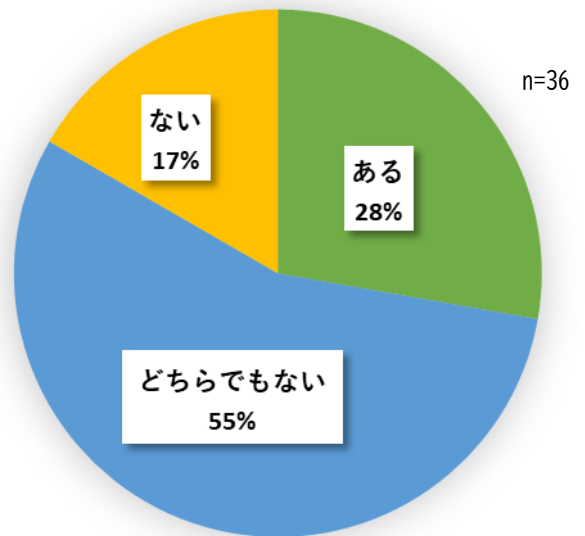
データでふりかえる JVCC2022



職場や地域での学びの活用



職場や地域での企画の意向

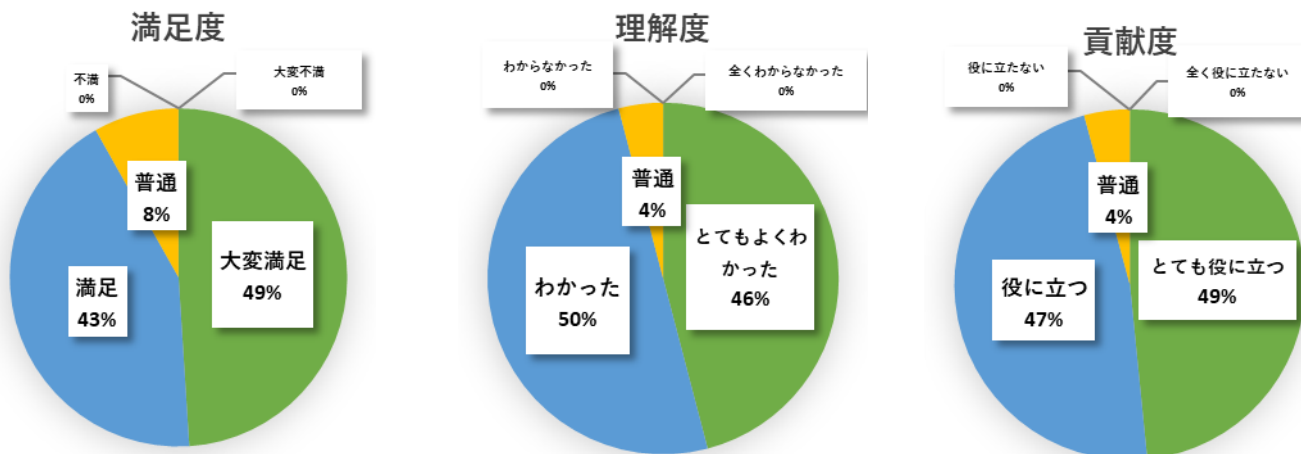


具体的な活用方法や場面（回答の一部）

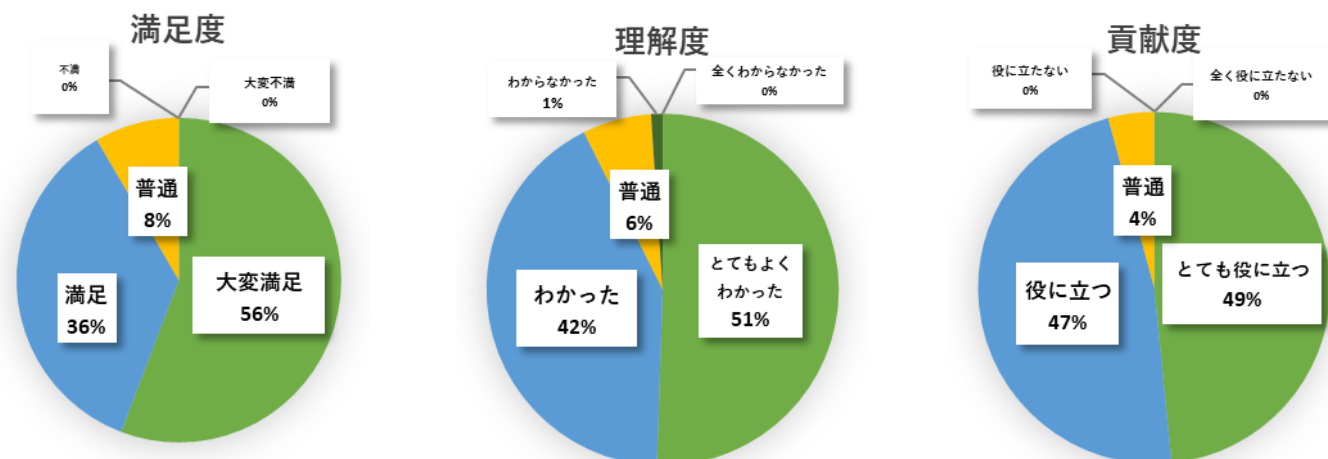
- ・ 情報発信する際に、言葉と活動の本質にたちかえる、この言葉はどういう意味だろうと言葉を受け取る時も伝える時も、言葉やボランティア活動の本質を意識していきたいと思います。学生が長期的にボランティア活動をするために学生スタッフとして、分かりやすい発信をしていきたいです。学生自身が自分にできることはなにか目標設定していけるような環境を作りたいと感じました。
- ・ まずは雑談できるサロンのような場所をつくりたい。
- ・ ボランティア活動者の皆さんと一緒に、ボランティアの価値について考え続けていきたい。CSWとしてもそうだが、1人の人間として地域の人を知る、地域を知る。（資源やNPO団体など）
- ・ 私自身、ボランティアコーディネートする上で「ボランティア」の意義や本質を丁寧に説明しながら、向き合うこと！今以上に丁寧にしていけたらと思いました。
- ・ 学生の相談対応のときに学生と団体間の感覚の違いのギャップを無くしていく。
- ・ 外国人の方たちの、緊急小口資金利用後のコーディネーター養成の取り組みなど「支える側、支えられる側の垣根をなくした取り組み」が大変参考となった。ご本人のできる事、できない事を正しくアセスメントし、得意を伸ばして役割のある存在に。支えられる側が支える側になる、この視点や意識の持ち方が大事と思った。
- ・ B3分科会で学んだ「学生」と「地域」両方向への働きかけ、丁寧なコミュニケーション。

各セッションの満足度、理解度、学びの貢献度

A 分科会 n=98



B 分科会 n=95



特に印象に残ったセッションや報告内容、登壇者の言葉（回答の一部）

- ・ A3：違和感、もやもやを大切に。 B7：デジタルは万能じゃない。余白の大切さ。
- ・ B2 分科会の中で「ネットワークは“なぜ繋がっているのか”の軸がネットワーク内で共有されていないと、つながり続けられない」という指摘が印象に残りました。
- ・ 『つかんだ手を放さない』 ・ コーディネーターもボランティアの「一員」であるということ。
- ・ やはり言葉の意味を正しくつかむ必要があるということは非常に心に残った。違和感に敏感になる事を意識してこれから活動していきたいと思います。
- ・ 青写真をえがく おもしろがる 時には空気を読まずに踏み込む お客さん、消費者になっている人は学びや気づきの場を持っていない人 危機感の共有 やったふり連携と本当の連携 自負心を持っていい コーディネーターの個と参加する人の個の両方が生きることが大切
- ・ 「慰問」という言葉を知らない世代が、その言葉を使っているのは、誰かが教えているにほかならない。そのことの方が問題であるといった発言に、確かにそうだと思った。
- ・ ぼらんとす栗原さんの言葉で「地域の人が気づいて、学ぶ、実践する場があるのか」が印象に残りました。それを応援する中間的支援組織があるのか？もしくは、それが自分の所属組織（社協）でできるのか？考えていきたいと思います。 違和感をそのままにしない。（ボランティア A3 分科会、清水さん）

市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会2022 実行委員名簿

No	氏名	所属	No	氏名	所属
1	上田 英司	日本NP0センター	18	土田 恭仁子	宇治市社会福祉協議会
2	小原 宗一	北区社会福祉協議会	19	遠山 昌子	生き方のデザイン研究所
3	開澤 裕美	中央大学ボランティアセンター	20	戸田 幸典	丹波ひとまち支援機構（たんえん）
4	鹿住 貴之	JUON（樹恩）NETWORK	21	橋詰 勝代	高島市社会福祉協議会
5	唐木 理恵子	紬ワークス	22	早瀬 昇	大阪ボランティア協会
6	菊池 哲佳	多文化社会専門職機構	23	疋田 恵子	杉並区社会福祉協議会
7	熊谷 紀良	東京ボランティア・市民活動センター	24	藤井 美香	横浜市国際交流協会
8	栗原 穂子	ほらんたす	25	藤掛 素子	明治大学ボランティアセンター
9	齋藤 尚久	日本社会教育士会	26	法橋 聡	丹波ひとまち支援機構（たんえん）
10	佐藤 正枝	日本社会福祉士会	27	明城 徹也	JVOAD
11	佐藤 美恵	ほらんたす	28	武藤 祐子	千代田区社会福祉協議会
12	杉浦 健	共働ブラットホーム	29	文珠 正也	日本協同組合連携機構（JCA）
13	仙波 愛優佳	和光市社会福祉協議会	30	矢富 明德	佐賀県国際交流協会
14	大藤 毅	国立大洲青少年交流の家	31	山崎 智文	京都産業大学ボランティアセンター
15	竹脇 恵美	長野県長寿社会開発センター木曽支部	<事務局>		
16	薦 直宏	日本生活協同組合連合会		後藤麻理子	日本ボランティアコーディネーター協会
17	土崎 雄祐	とちぎ市民協働研究会		神保 彩乃	日本ボランティアコーディネーター協会

実行委員会 開催実績

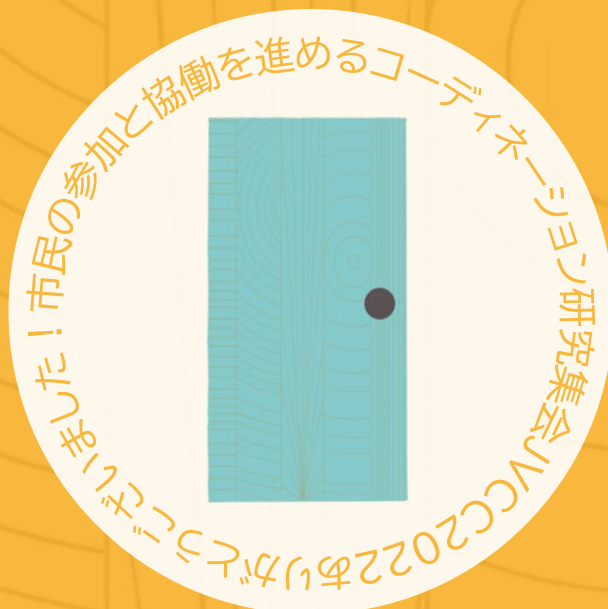
回	開催日	主な協議内容
準備会	2022年 4月27日（水）	実行委員会の人選、依頼内容、態勢・役割分担等
第1回	5月22日（日）	開催趣旨の確認、現場での課題出し等
第2回	5月31日（火）	問題意識の整理、分科会テーマ等につながるキーワードの抽出
第3回	6月19日（日）	【公開プレ企画】分科会企画のプレゼンテーションと協議
第4回	6月29日（水）	【公開プレ企画】分科会企画のプレゼンテーションと協議
第5回	7月10日（日）	分科会企画のプレゼンテーションと協議
第6回	8月 3日（水）	全体の枠組み確定とオープニング企画
第7回	8月31日（水）	開催要項の内容協議、広報戦略の策定
第8回	9月21日（水）	開催要項の確定、広報対策と役割分担、その他のタスク確認
第9回	10月19日（水）	クロージング・交流会企画、集客対策、当日までの段取り確認
第10回	11月 8日（火）	広報、当日のロジ確認、資料共有方法、共通ツールなどの確認
第11回	12月 2日（金）	運営最終チェック、準備進捗確認、クロージングの進め方確認
公開会議	2023年 1月24日（火）	【公開企画】ステップアップミーティングの開催（参加者を交えての評価）
第12回	2月 2日（木）	研究集会の振り返り、アウトプットの方法等

協 力

公益社団法人日本社会福祉士会
日本生活協同組合連合会
一般社団法人多文化社会専門職機構(TaSSK)
認定特定非営利活動法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)
社会福祉法人東京都社会福祉協議会東京ボランティア・市民活動センター
特定非営利活動法人ハンズオン! 埼玉
社会福祉法人大阪ボランティア協会
特定非営利活動法人丹波ひとまち支援機構
特定非営利活動法人ぼらんとす
一般社団法人生き方のデザイン研究所

後 援

社会福祉法人全国社会福祉協議会 / 社会福祉法人中央共同募金会 / 認定特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会
認定特定非営利活動法人日本NPOセンター / 公益財団法人日本YMCA同盟 / 特定非営利活動法人日本病院ボランティア協会
一般財団法人自治体国際化協会 / 特定非営利活動法人国際協力NGOセンター / 一般社団法人環境パートナーシップ会議
ESD活動支援センター / 一般財団法人児童健全育成推進財団



市民の参加と協働を進めるコーディネーション研究集会 報告書

発行日 2023年2月28日

発行者 特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会

東京都新宿区神楽坂2丁目13番地 未よしビル別館30D

TEL 03-5225-1545 / FAX 03-5225-1563

Email jvca@jvca2001.org

URL <http://jvca2001.org>